



播州名所巡覽圖繪

三

ル 4
4734
3



門ル
號 4734
卷 3

多
有
藏
書

播磨名所巡覽圖會卷之三目錄

山	慈眼寺	高祥寺	高畑村
土山	新在家古塔	横野寺	教信寺
寺	中口古塔	平井村教心僧	泉式部塔
寺	下居清水	日圓大明神社	右子岩
具平親王塚	常樂寺	崇神天皇陵	七騎塚
二塚祠	妙見大明神	天満宮	常任寺
中津村塔趾	加古驛	加古松	二見浦
五辻大明神	加古湊	加古波	德源寺
天満宮	觀音寺	瑞應寺	徳源寺
長徳庵	假寝岡	後勝寺	後吉祠
松元寺	福里村代神樂	蓮花寺	後吉祠
砂子大明神	季房御古塔趾	別府	後吉明神社

山
土
寺

四
門

播磨名所巡覽圖會卷之三

加古郡

土山

海石七加古郡

慈眼寺

海石の西

遍照山高洋寺

日村

高畑村

新在家古塔

奥系を引白尾翁諸國より集り

雲生山安養寺

一三村

郷人之後深き

横尾山横尾寺

新基法道仙人之十八代小松天皇の御祈所

寛平法皇潜居り加蓋

念佛山教信寺法泉院

加母あり親善の靈記の室又思以一名横尾の親善

あは九倍の中

信書一帖と云々令々法津堅固の僧之清和帝

の御宇

封境廣大にして僧院十餘坊あり寺以八百石

三ノ貫と揚

其後兵火ノ罹り回縁及ぶ又崇徳院の御宇

を揚る國中

ノ人民此道場ヲ集り念佛修好息る事

葉院の御宇

三百石を揚りけ時法云宗西山流義と云々

大塩

天神祠

的形

神祠三基

楠岩

的形天満宮

海岳寺

大帯祠

八家地苑

神本左幣左

都津井

安樂寺

教恩寺

園福寺

出敷摩

八暖宮

觀音寺

天祚山古城

大澤清水

長樂寺

助永池中待

高津座山

大谷村

鷹梁山

唐ノ塔村

志吹ノ祠

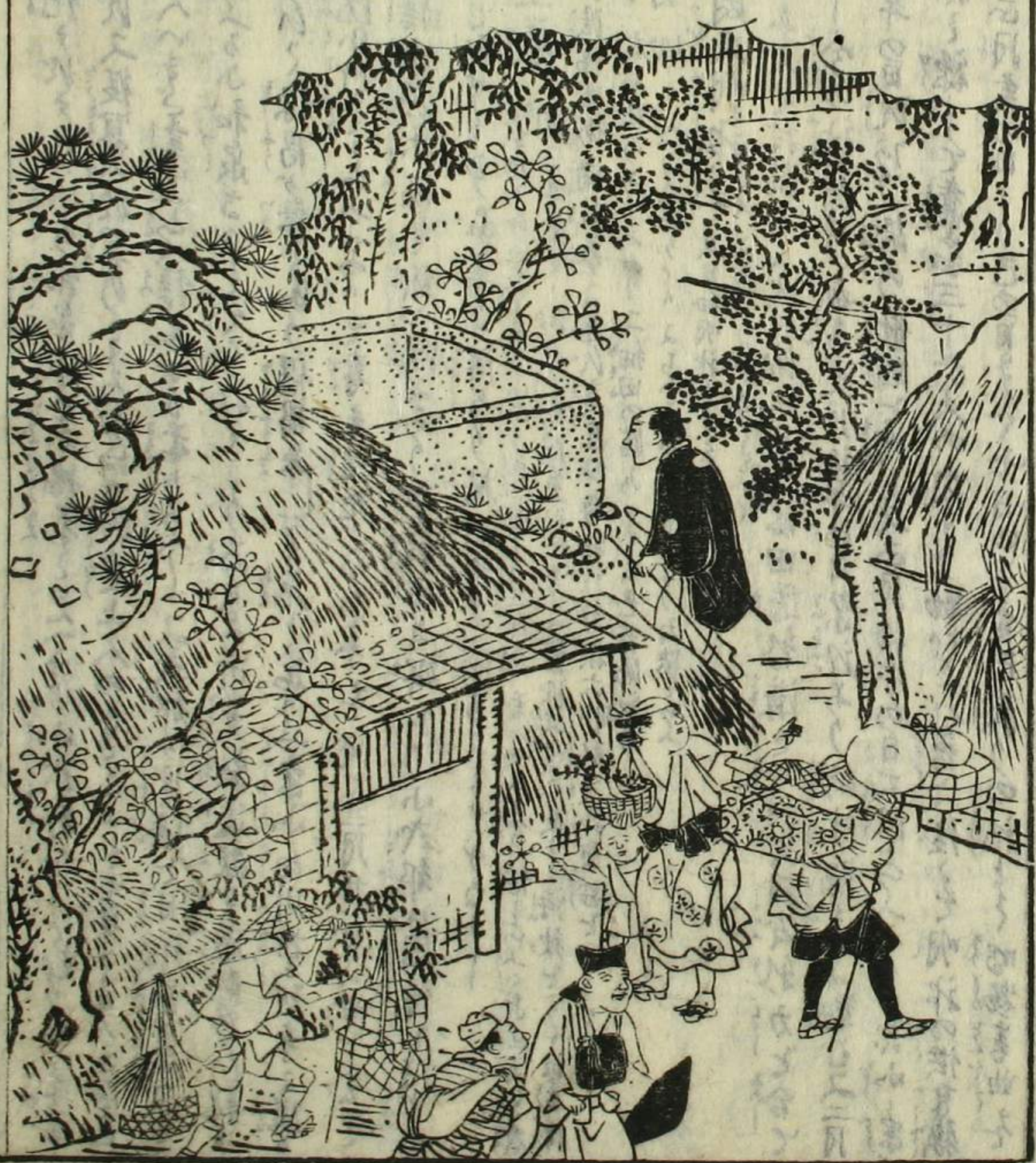
法華山一系寺

中世妙見

奥院

法道仙人廟

下居の清水



九日より十八日まで一七ケ日乃同念佛の勅符終じて末流又十余寺
 出勅にともむしし諸堂殿をりし度この兵火よりりて已滅し
 今本堂岡山半親善堂持樓教信上人塔僅に遺る

野に古城址

日本長母に即九門尉の居城之別名長治の幕はして
 天正六年御世あるを是と考り付終に漸く

平野村後心僧

西の懸集村の中は播磨國平野といふ所なりふりて海に白ひてかたをりし
 後心僧の所ありてそ處に同族の妻ありてしりてりて後我

の附に里に獨りて命終を遂ぐりといふ

和泉式部塔

細田坂とも下居坂ともいふり
 式部一條院の附に東門院の宮あり

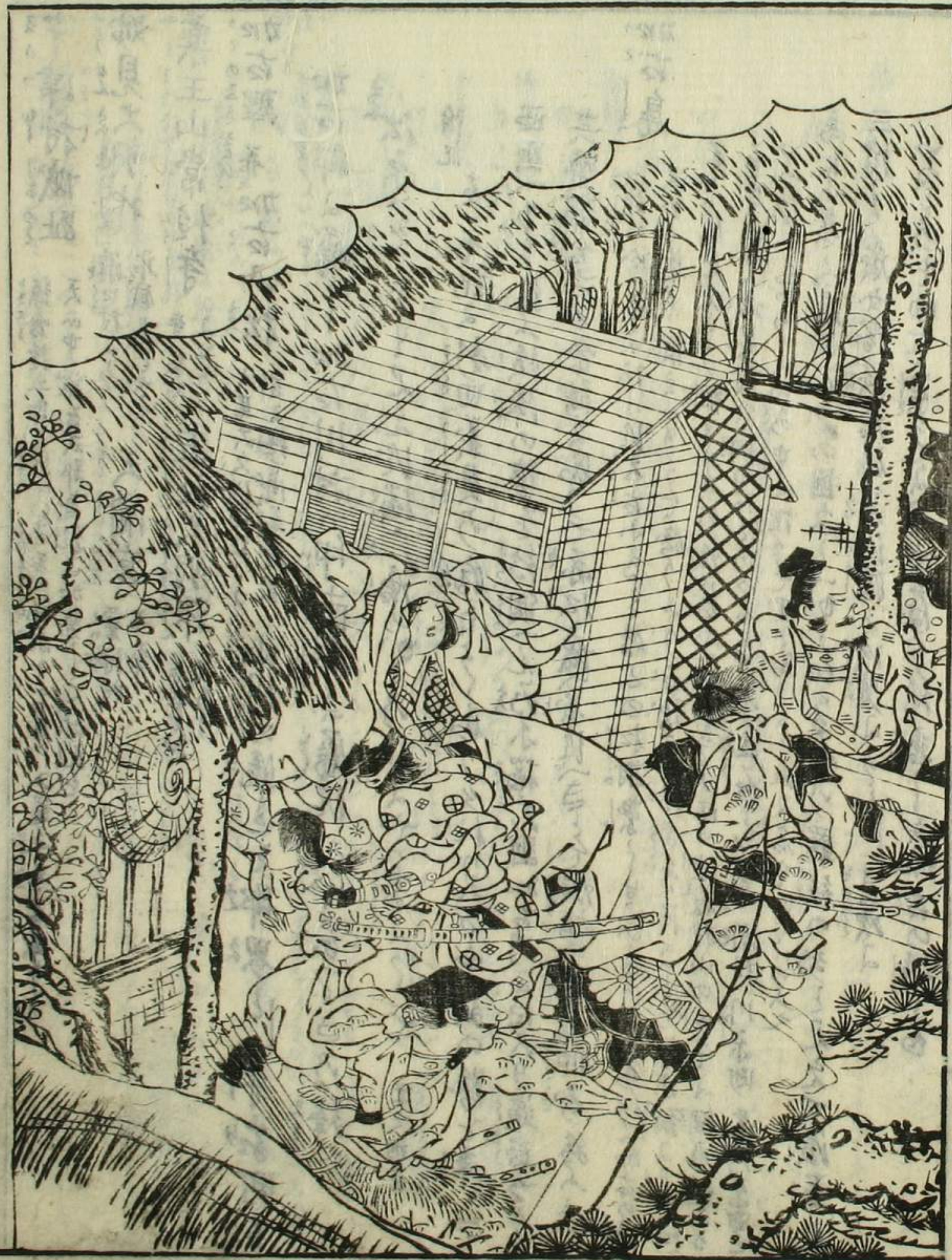
大江雅致が女にて和泉守道真の嫁一小式部と養ひ其後道真は離別

せりして小式部と播磨國赤穂郡若狹村に放らるり又平兵衛昌と再婚して

小式部と遠んといふに吟ひ書山乃性堂上人と値て法華經化機論品の

後真入於真の文の意と況終人と徳て和歌を詠ん 徳神の臨曲抄の歌

晴より園き中を浴入りぬ浴してる小照しせむの曙の月 和泉式部



七騎塚
 陸奥に於る眞乃牙
 六郎を眞をこゝめ
 其堂七騎塚に戦死
 して眞の雲州へ
 逃るるなり

我心靡子乃後りの網子繩とゆへ心やむとれまゝ
 うらへてかこれ後りまひく網の糸糸若くはせまゝ
 加古驛 今加古印南郡界と驛寺家町加古川と家つき
 置り上又加古驛とゆへ寺家町よりつり

二見浦

郡中東の海辺あり今東二見の二村あり又修験の村なり
 和歌深難して分明なり此は極楽の池と傳てあり

天満宮

東二見よりあり

徳源寺

東二見よりあり

長徳庵

東二見よりあり

潮音山松元寺

東二見よりあり

任吉祠

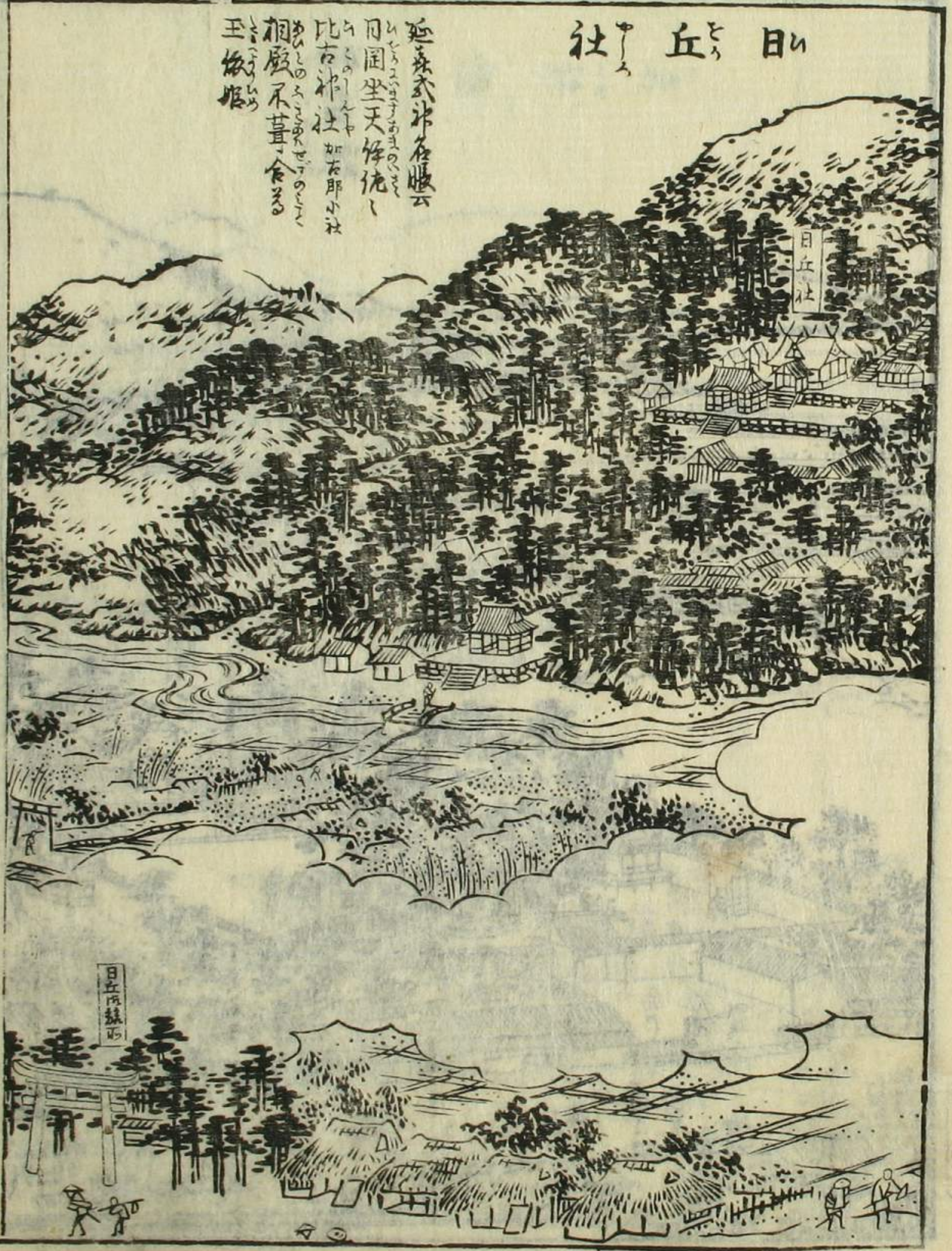
東二見よりあり

青雲山蓮華寺

東二見よりあり

大納言寺

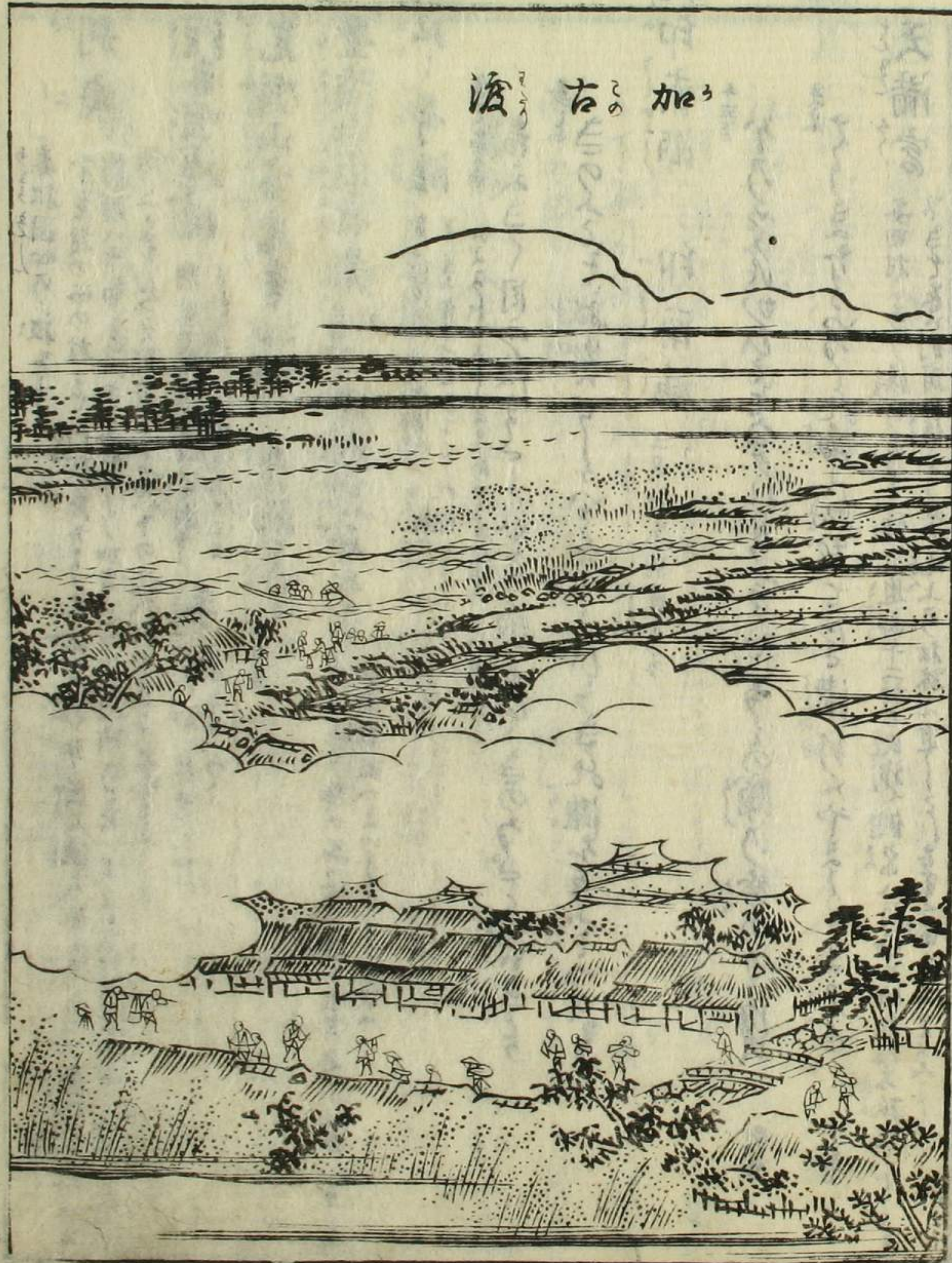
東二見よりあり



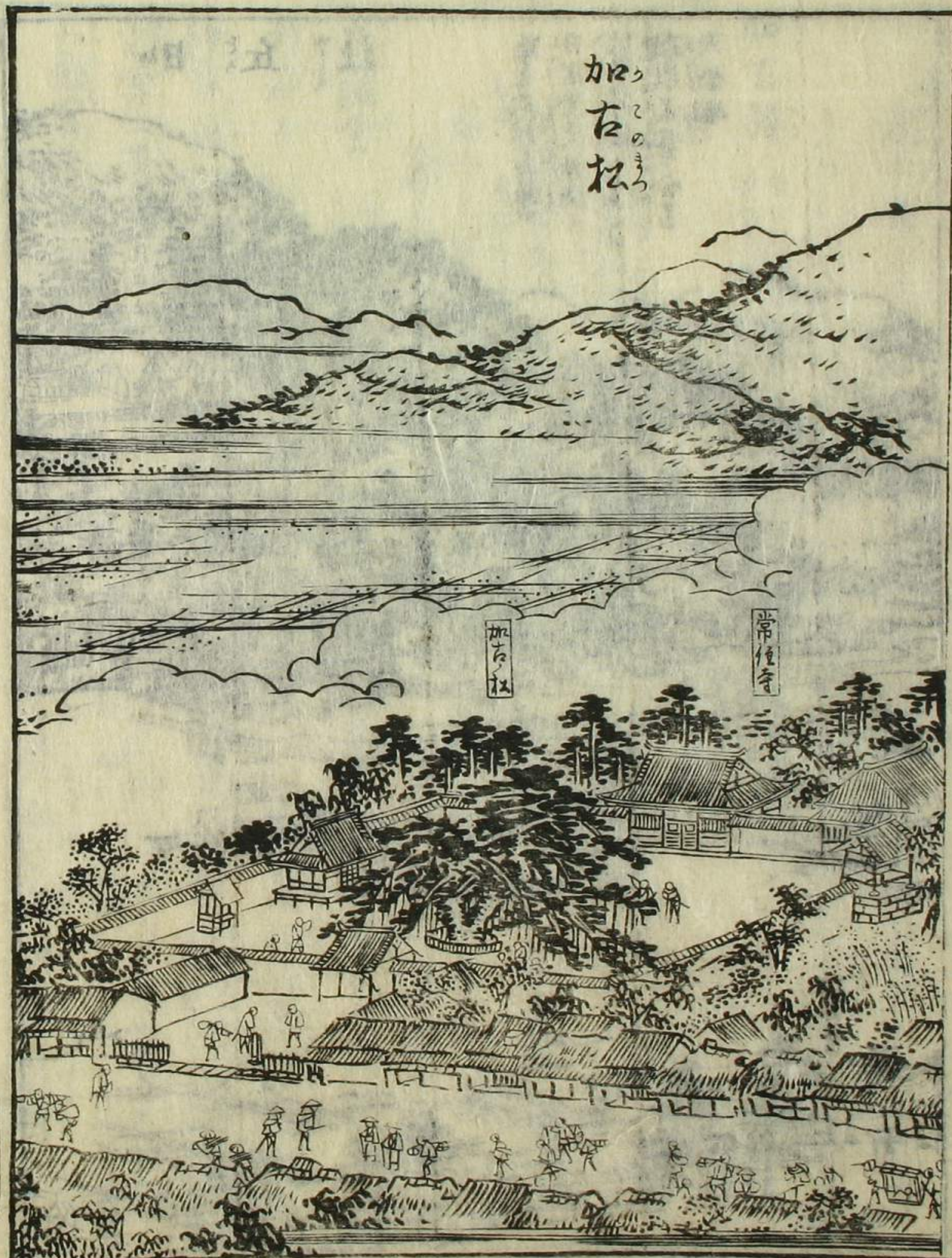
日丘社

延喜式水巻云
 日丘坐天降伏し
 比古神社 加古郡小社
 相殿不葺舎
 玉依姫

加の右の渡



加の右の松



赤松園心の松あり
別府 赤松村の西の村を阿用居たりと云ふ松あり其松は入道入道はしむる其松日記云
別府八十郎と云ふ者赤松あり加古川の辺阿用居を一本と云ふ石を八十丁と云ふ
依て一本と改めて別府と云ふ松の八代村の松は一本と云ふ

恒吉明神祠 別府の邊にありて村中
手枕松 赤松の石
先明山宝苑寺 別府村
牛頭天王 若田村

聖陵山園長寺 長砂 境内山石屋あり
寺堂十三無の画をうけし十三年あり其内一筆を
山田親政へまかせしと云ふ

比奇灘 別府のやりの海なる
赤松集集 赤松集集はひらき此灘と云ふ
赤松集集 赤松集集はひらき此灘と云ふ

青みきく月ふはまきく此灘と云ふ
三のふこそ松出いせりいせりいしき此灘をまきつる

所名 印南浦 二見を左別府と云ふ

千五百 かのりつらひのいこそまきまきと云ふの浦の登のりは史 石史

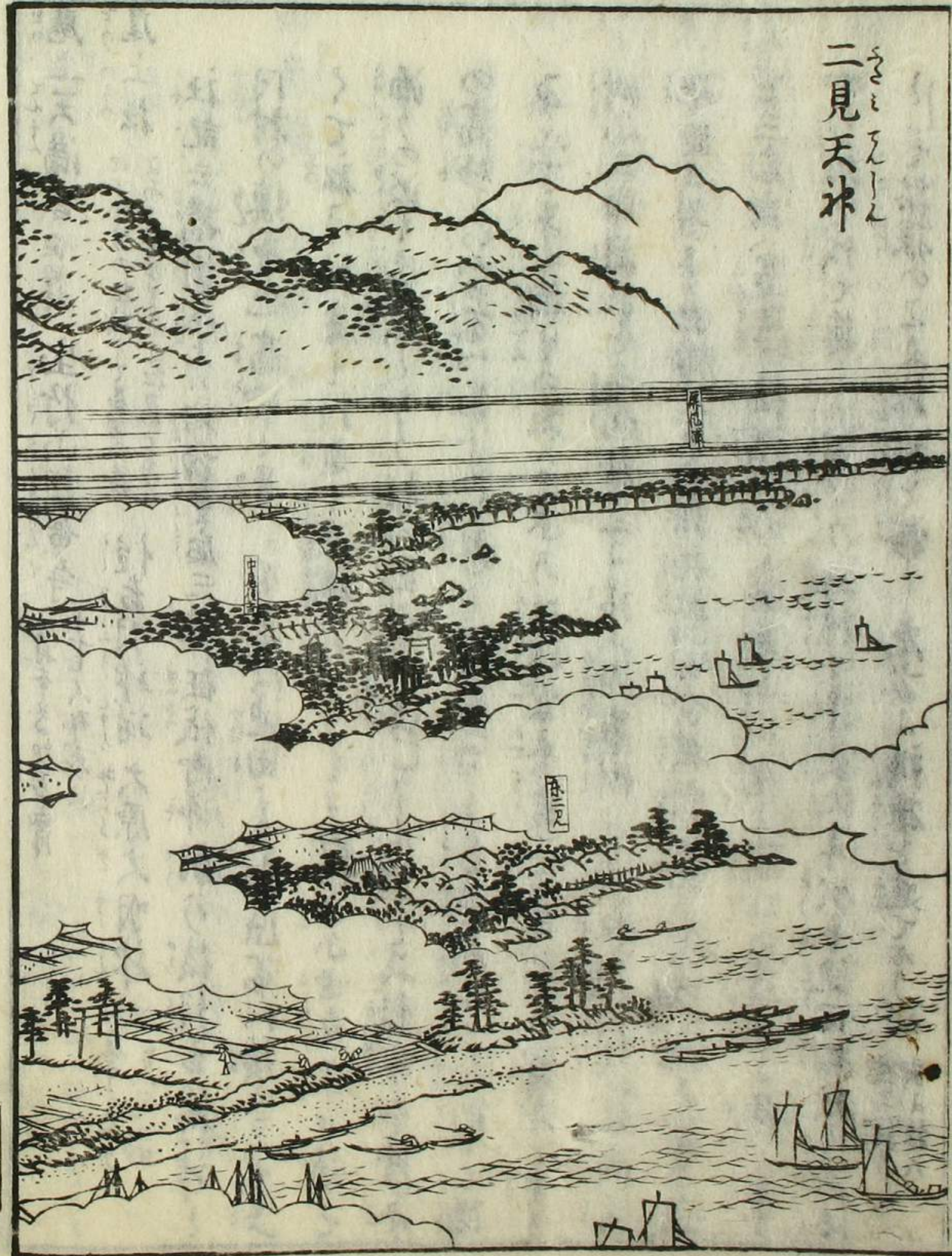
まき たりまきまきと云ふ海は松出てたき漕ひのやまきと云ふ也 中勢

天満宮 安田村あり候乃宮と稱し此郷十二村の氏神也御祭八月晦日此松林に抵八丁あり
下まき赤松別府の傍より西尾上り松林に近し此松林之南下まきと云ふ

所名 尾上天満宮 池田村 生竹山観音寺 同村を記す毎月十七日人祥祭あり

尾上松 比丁地方の松林と云ふ長田の松 恒吉明神祠 大原大明神 同村中あり
社記云播州尾上川功重后三韓征伐御降朝の後恒吉の河津と
同村の鎮座也高砂と号く石末は池田より下りけ石に接し人家多
くて松乃竹末と注進く漁獵のたよりもよじき不世変多と積とて
涌りの波も遠流と云う松乃玉入しよじしとて又数年を経て今
の高砂といふ石末へ家と移し日石と云うる高砂尾上とお別れて隔
り八丁斗之相せの松天正乃比羽柴秀吉三本松別所小三郎と云ふ
附小三郎松を毛利輝元と清人即藤州より小早川隆景吉川元
春面大郎とて越勢三万金誘兵松二百余艘明石郡奥垣の浦より石根
と三本松へ運送の後浩の乃又無軍今の尾上高砂の邊り一陣と云う
かの松と成て毎くひまきり枯朽て慶長九年飲自池田輝政の治法
として石根のよみ津祠と移し石方と稱せと建てたり也 徳又松あり

尾上松 比丁地方の松林と云ふ長田の松 恒吉明神祠 大原大明神 同村中あり
社記云播州尾上川功重后三韓征伐御降朝の後恒吉の河津と
同村の鎮座也高砂と号く石末は池田より下りけ石に接し人家多
くて松乃竹末と注進く漁獵のたよりもよじき不世変多と積とて
涌りの波も遠流と云う松乃玉入しよじしとて又数年を経て今
の高砂といふ石末へ家と移し日石と云うる高砂尾上とお別れて隔
り八丁斗之相せの松天正乃比羽柴秀吉三本松別所小三郎と云ふ
附小三郎松を毛利輝元と清人即藤州より小早川隆景吉川元
春面大郎とて越勢三万金誘兵松二百余艘明石郡奥垣の浦より石根
と三本松へ運送の後浩の乃又無軍今の尾上高砂の邊り一陣と云う
かの松と成て毎くひまきり枯朽て慶長九年飲自池田輝政の治法
として石根のよみ津祠と移し石方と稱せと建てたり也 徳又松あり



二見天沖

別荘
恒吉

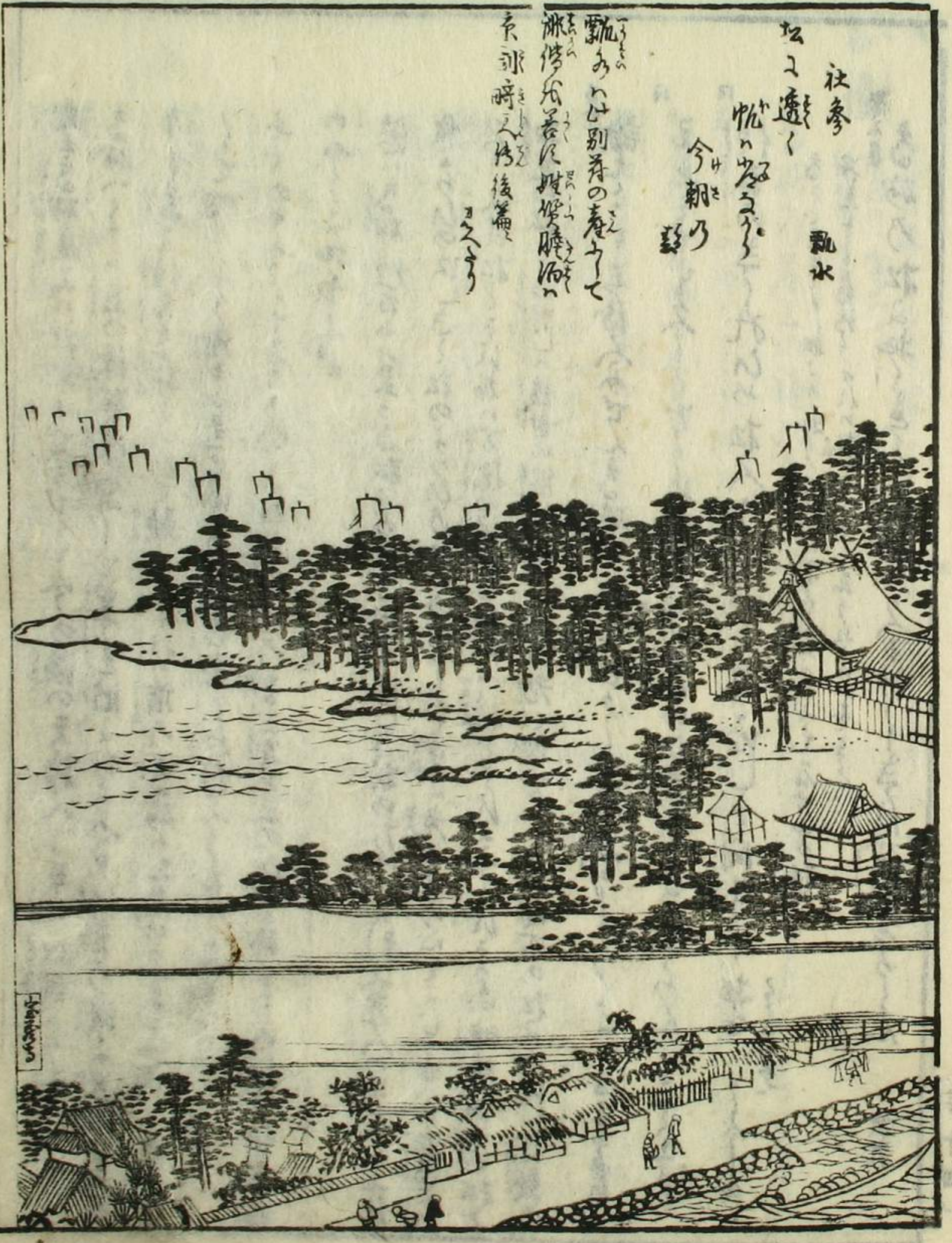
松の津本に
て幹の権虎の
跡踏のてく
枝葉の跡踏

周りに十歩
耳に二十歩
右に六歩
実の程を平
あきき靈止
り



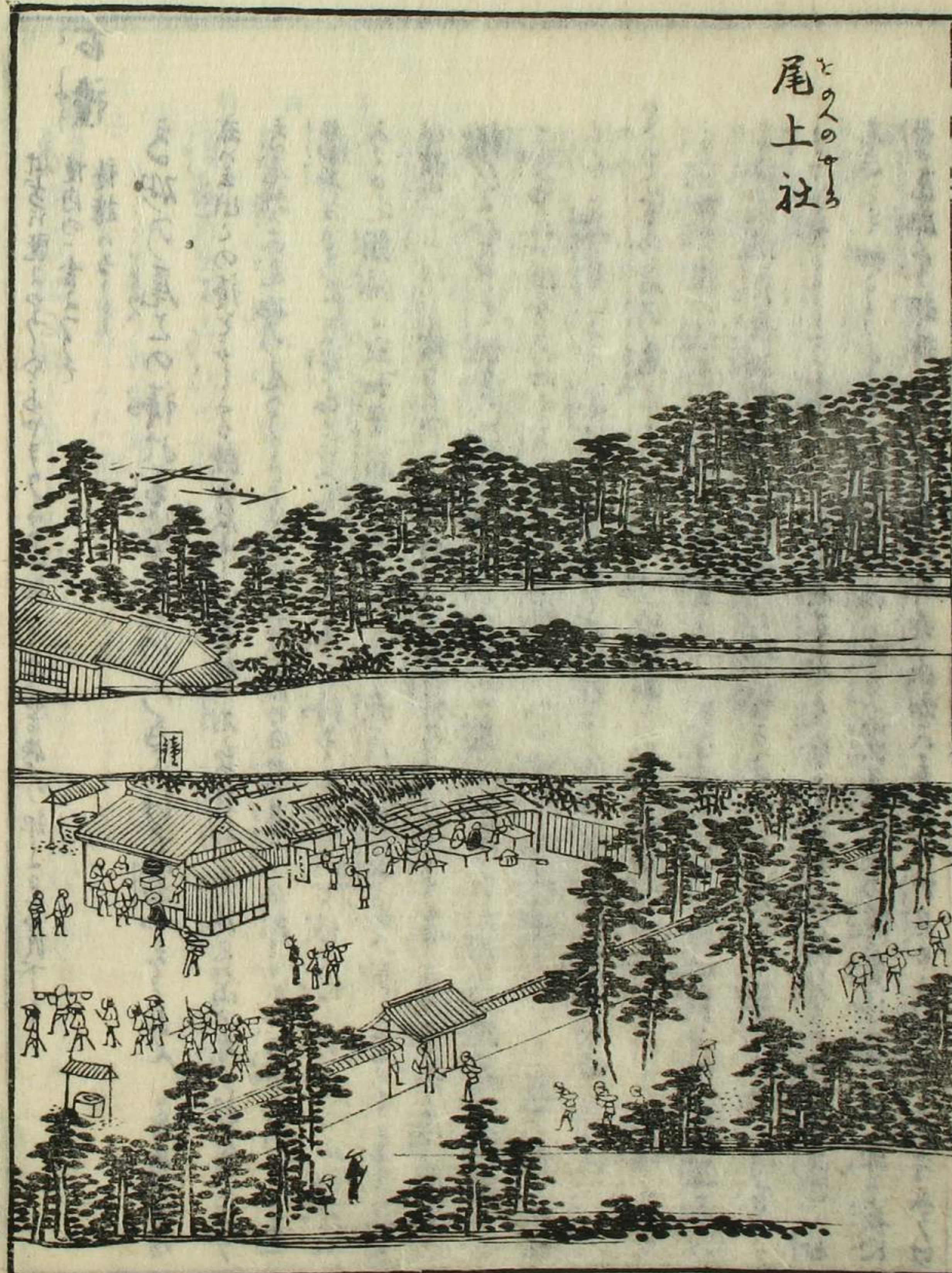
江参
松の遠く
枕の如き
今朝の
影

瓢箪は別荘の巻にて
流傳の巻に地盤の
系跡の巻に後篇
ヨエ





とりのや
尾上社



たゞしかなありて浪花は送る不あり 福又大平十年の年号抄がらふ見え
たり是西晋二世惠帝の附して日本寛政九年までなり三百九十九年以後
の日平承和又平よりには百余年之迄と以て尾上刀田山の二藩也と云ふは
百余年の物とは見えずなりされども百海より佛經と始めて日本へ渡せり
明天皇十三年よりて九百二年の年号なりし 鮮明天皇八十年より内藤
最長より入平十年以後の年号なりしは是也 百海或は異國とのものを
徴として造りしめ入平故也と云ふは是也 百海或は異國とのものを
入平天王寺六字寺の藩と云ふは是也 漢海の藩と云ふは是也 竹内
物と云ふは是也 入平寺宮より入りしは是也 三寺寺儀最長の昔也 似
児婿の耳と云ふは是也 是れも年号の次は是也 物と云ふは是也 中
は是也 海と云ふは是也

石松 尾上林の田の中あり 俗に云ふは小松と云ふ
養田祠 尾上村より入りしは是也 氏姓は是也 三神
今津川 尾上村の田の中あり 俗に云ふは小松と云ふ
高砂 尾上村の田の中あり 俗に云ふは小松と云ふ
高砂泊 尾上村の田の中あり 俗に云ふは小松と云ふ
高倉院 尾上村の田の中あり 俗に云ふは小松と云ふ
大渡 尾上村の田の中あり 俗に云ふは小松と云ふ
秋渡 尾上村の田の中あり 俗に云ふは小松と云ふ

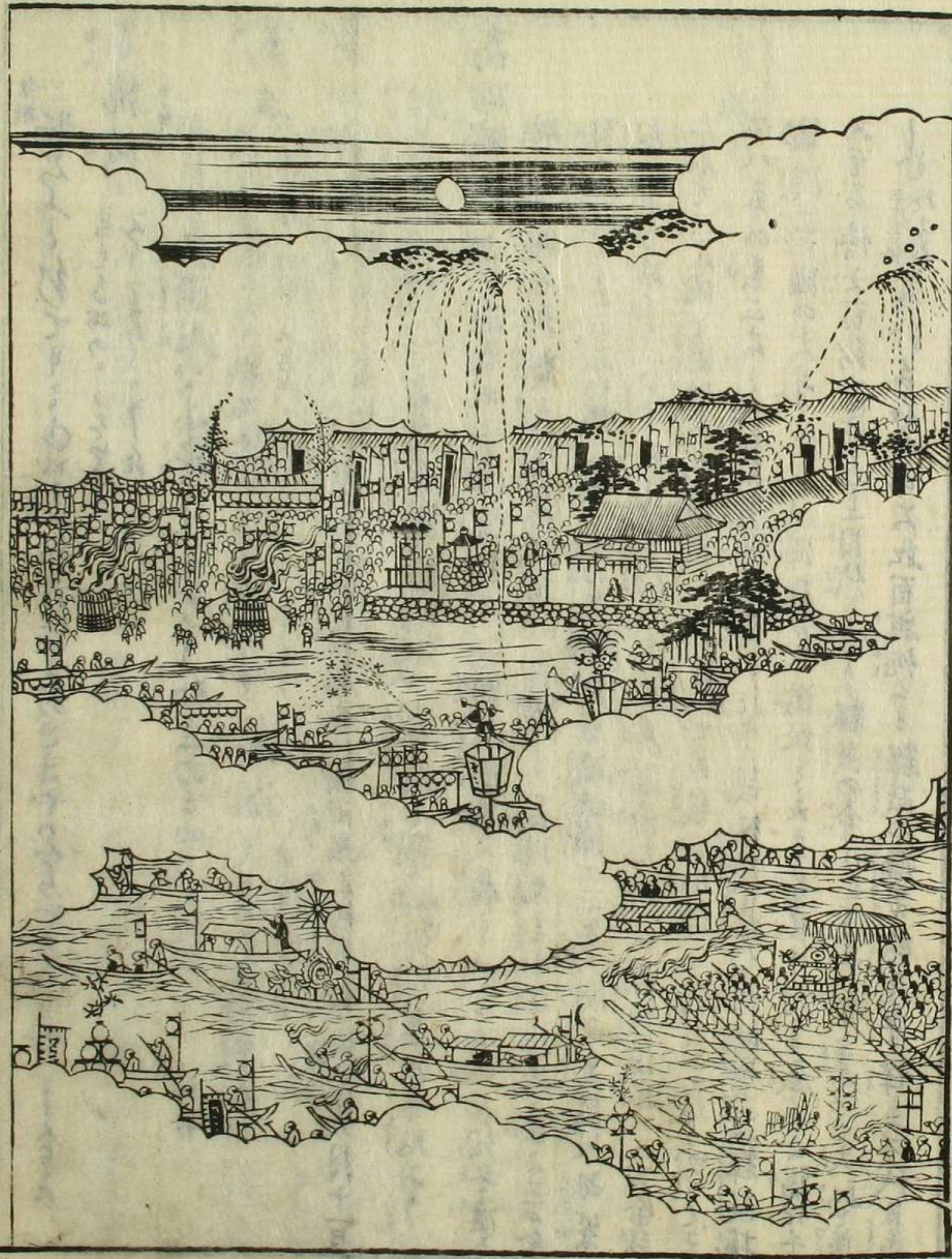
所名

砂の間に其後官家廢して民家の砂の諸國の通商大場の漆とありて
大渡つり入りしは是也 川あり下は海あり 船の出入は便して是也
易いなり 本邦出郡の名あり 船の出入は便して是也
今松林を倉庫と換て風塵と改めしは是也 船の出入は便して是也
石の舊名と抱ししは是也 南朝の神聖身護望園の地也

高砂泊 尾上村の田の中あり 俗に云ふは小松と云ふ
高倉院 尾上村の田の中あり 俗に云ふは小松と云ふ
大渡 尾上村の田の中あり 俗に云ふは小松と云ふ
秋渡 尾上村の田の中あり 俗に云ふは小松と云ふ
高渡 尾上村の田の中あり 俗に云ふは小松と云ふ

高渡

尾上村の田の中あり 俗に云ふは小松と云ふ



津島乃御座りて
 供養の樂也
 外船の傍に
 船子の櫓
 月星の老りと
 舟の教の
 旗標の波
 映し御侍布
 て御座り
 是近の景
 観之御座り
 て見侍
 を



後撰
物ろくく初てしよりの深りたまのこまやらちやまぬらん
本綿崎 見しよる砂のうらそく
五王ヶ浦 浦凡いふ小をうらそく
西外

荒井 る砂の西より昔陸を言しお上りしとぞ
氷社 氏氷之祭氷大己妻命 例祭九月九日

高砂津祠 南陸川の南天の比 例祭九月九日
高砂城趾 堀を掘る三三三流系はして別不長流に属しけり砂のもみ手流る

附波社 相老の松 波持明流系 御深等
石鳥井額 波持明流系
戒祠二基 南門と出て 例祭里凡あり

附又中園毛利輝元三本の別あり荷持し若川元妻小更川流系三万余
砂と流らる三本の城へ送らる兵糧敷百艘け浦三三里の間より流るに
系若る砂より三本とのる因所と多く居通流を停り織田信忠三万余
を以て三本城と圍む毛利輝元三本と通せり後け浦は月日と送るかくて天
正八年のま三本とも出流し流る其後慶長八年地田おる輝政攝
備後三ヶ國の太守としてけ浦堀系を城趾とせし家臣中村重成は千
又百石侍士百騎と流らる目代とせり輝政の命として教材と集りて大和と送
りし 三十三易 其外も石余の大和百艘船り輝政の嫡男武元守輝貞の代目と

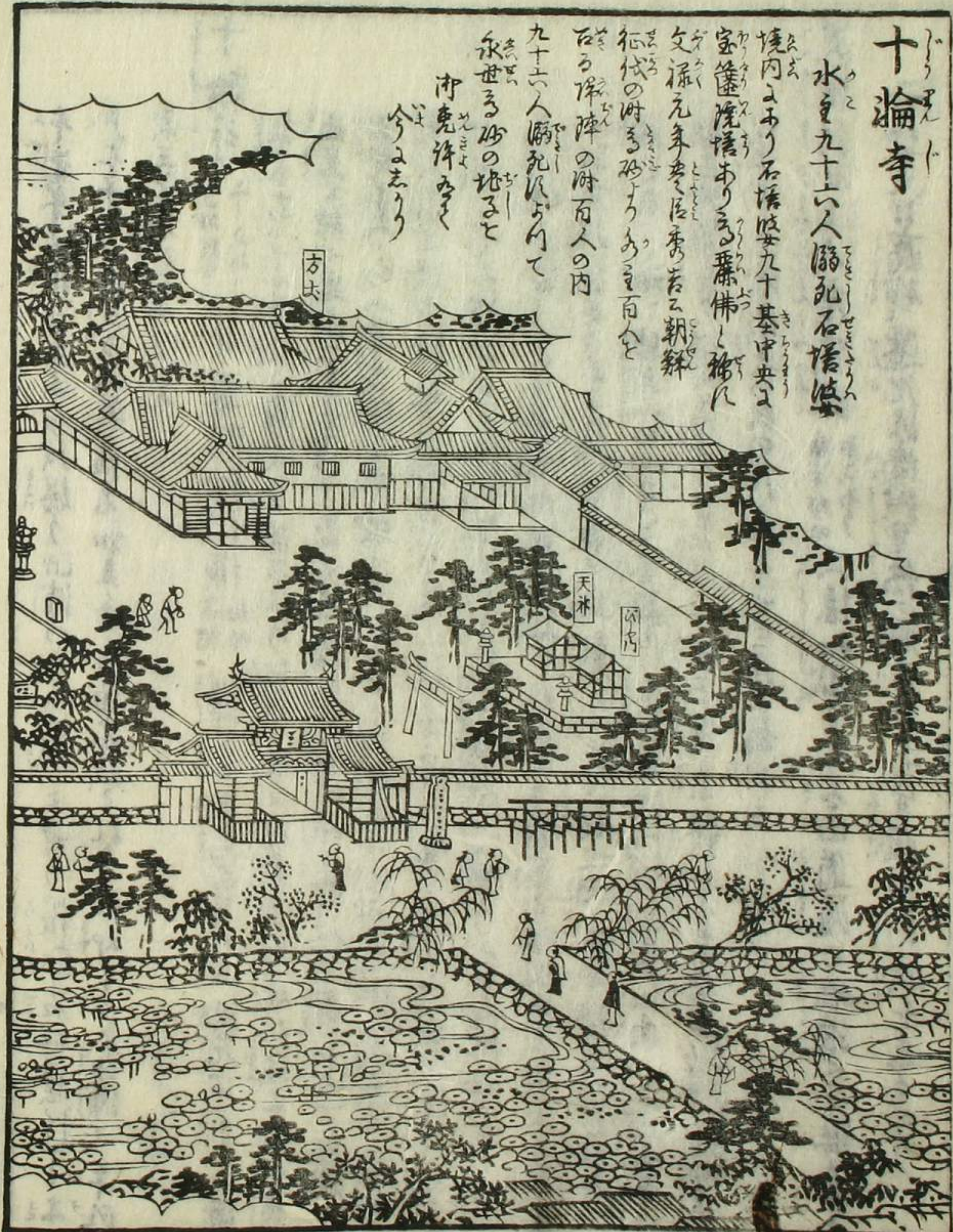
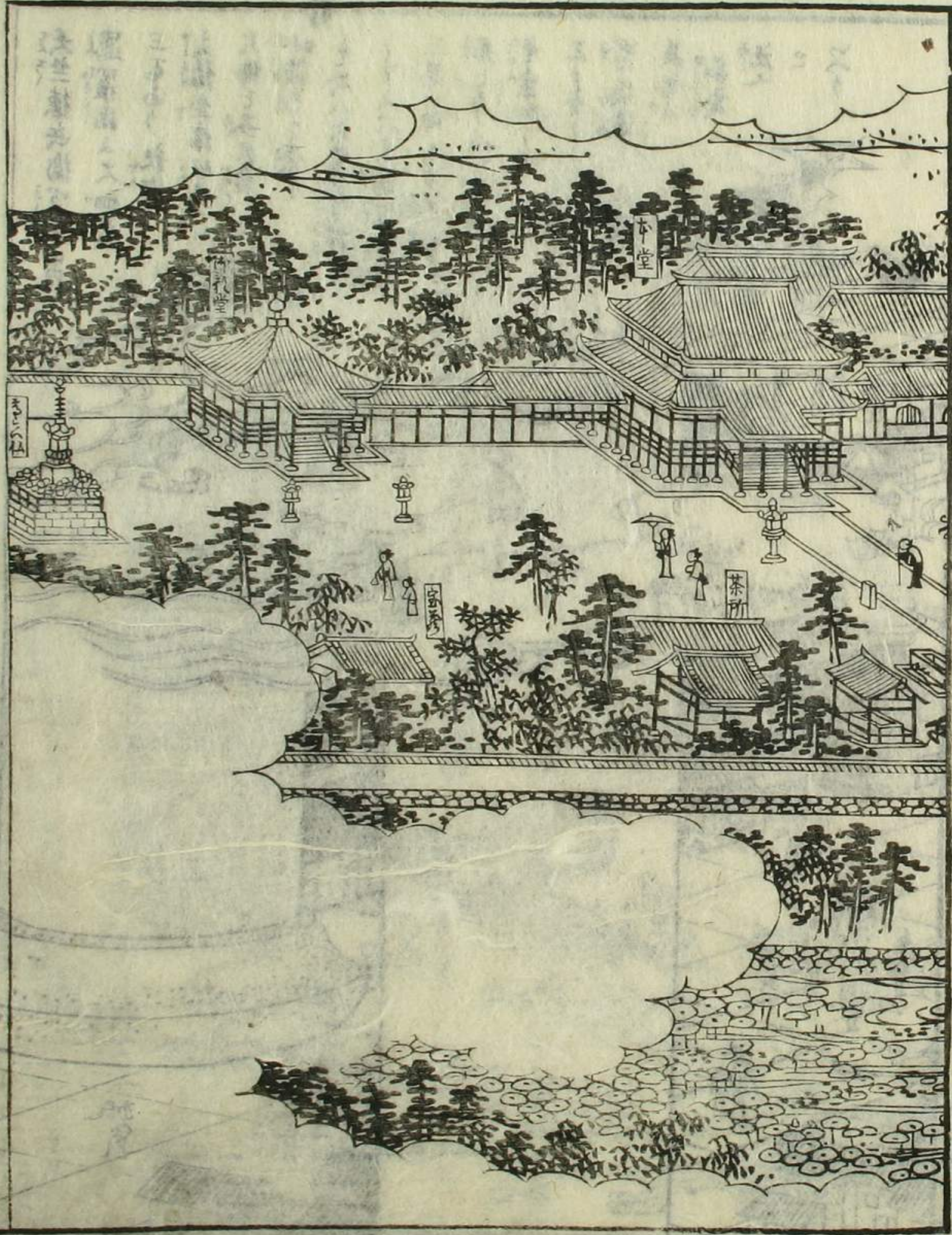
本寺又福二万三石分揚りけ浦の寺遺蹟とせり
戸を十一口又定り又其後元和年中本田忠政これを破却して出浦を午改
天王と造営ありしと

十輪寺 高砂村中の 本尊阿彌陀佛 西阿 祖師寺 因光法師の画教九方又十一面

因光法師之建永二年三月十九日法師滿遷の付け浦は町松を考らる
治那まゝの若き徳又降依りしれよつて衆俗の陸吹近郷より因て
去る宗と改め今西山光明寺東山後樂寺に屬して西山一流の権檀林小
本寺として法師二十又ヶ所所拜三番之吹徳流建曆乃ま法師降流の内
又け浦よせよき蓋念佛祭馬の地はあきり改宗は後限浦十方上人度政
小松原祥福寺として法師室籠り御教とるを得て岡山の中緒をいふ寺
納むる依りて地着山の四号と室籠山と改め其僧門の教を和慈院宮二高峯法
親王御深等といふ外寺室又長文の教を羅羅系張三七室の流教とす
の法事いふ所通遷の附の月よりて三月又執り

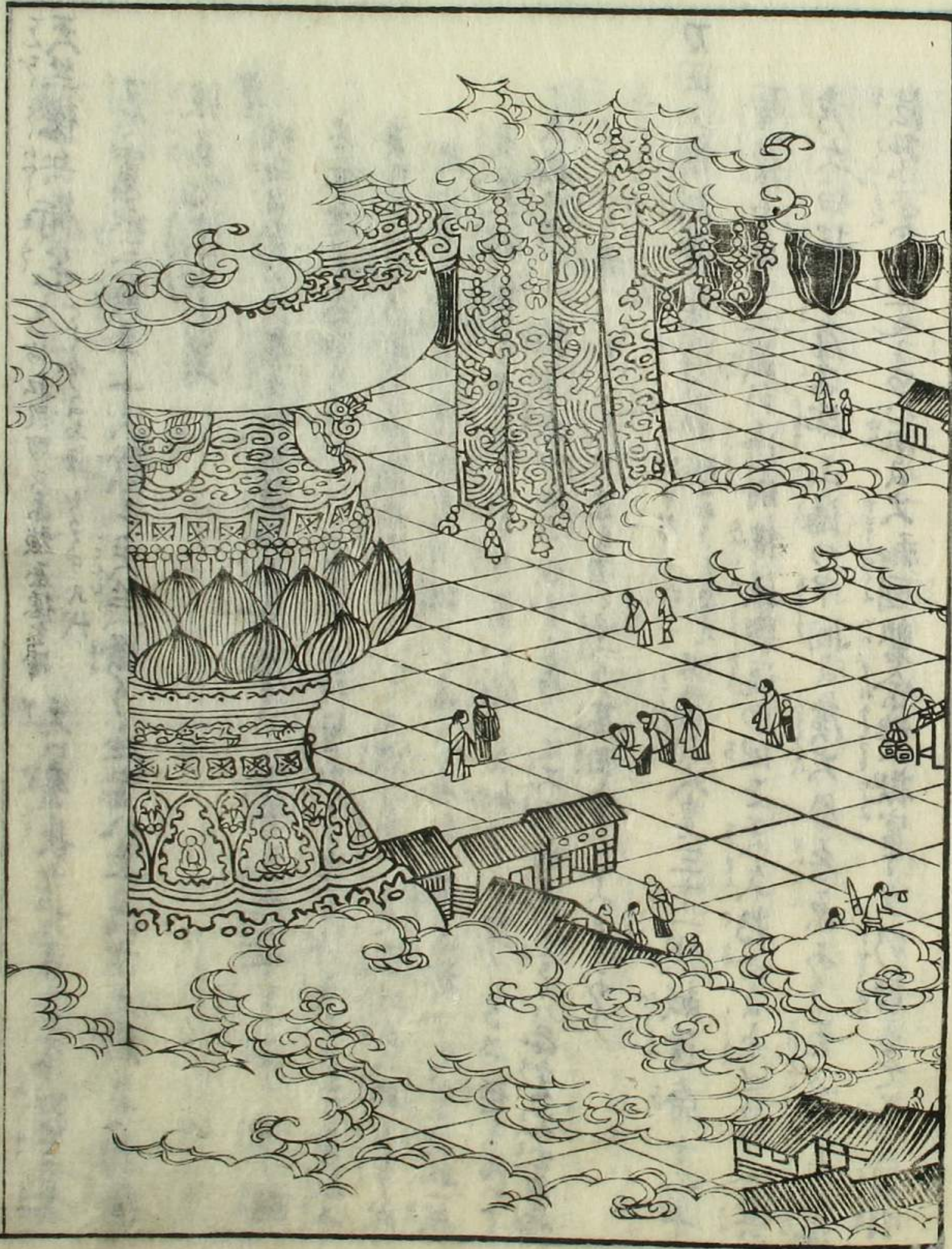
天空月西上人庵室跡 南寺町の 大徳知藏として右田道灌の嫡孫と心徳兼中

二月廿九日高砂遷化は尚徳生傳の冊子ありて生源の幼状をみる

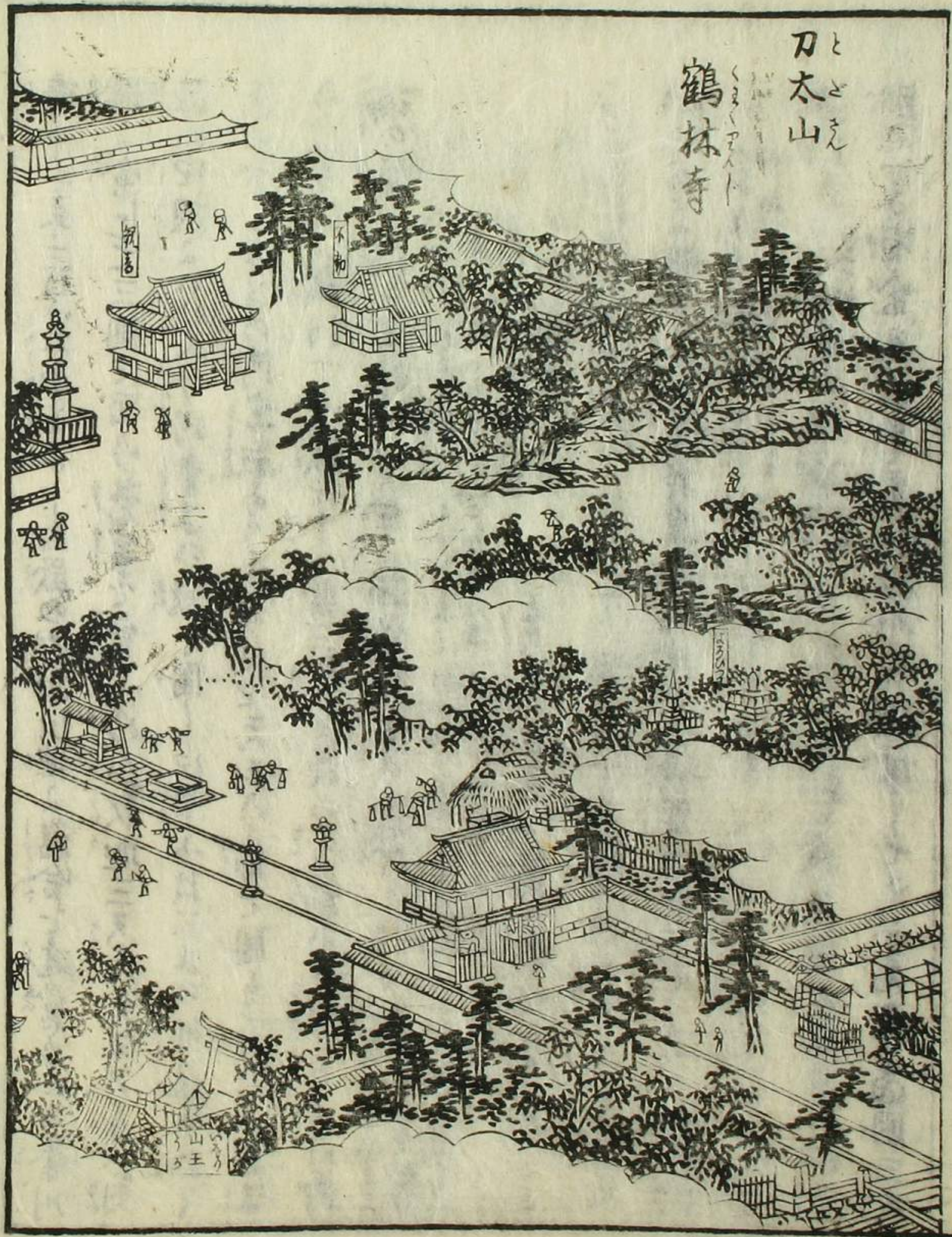
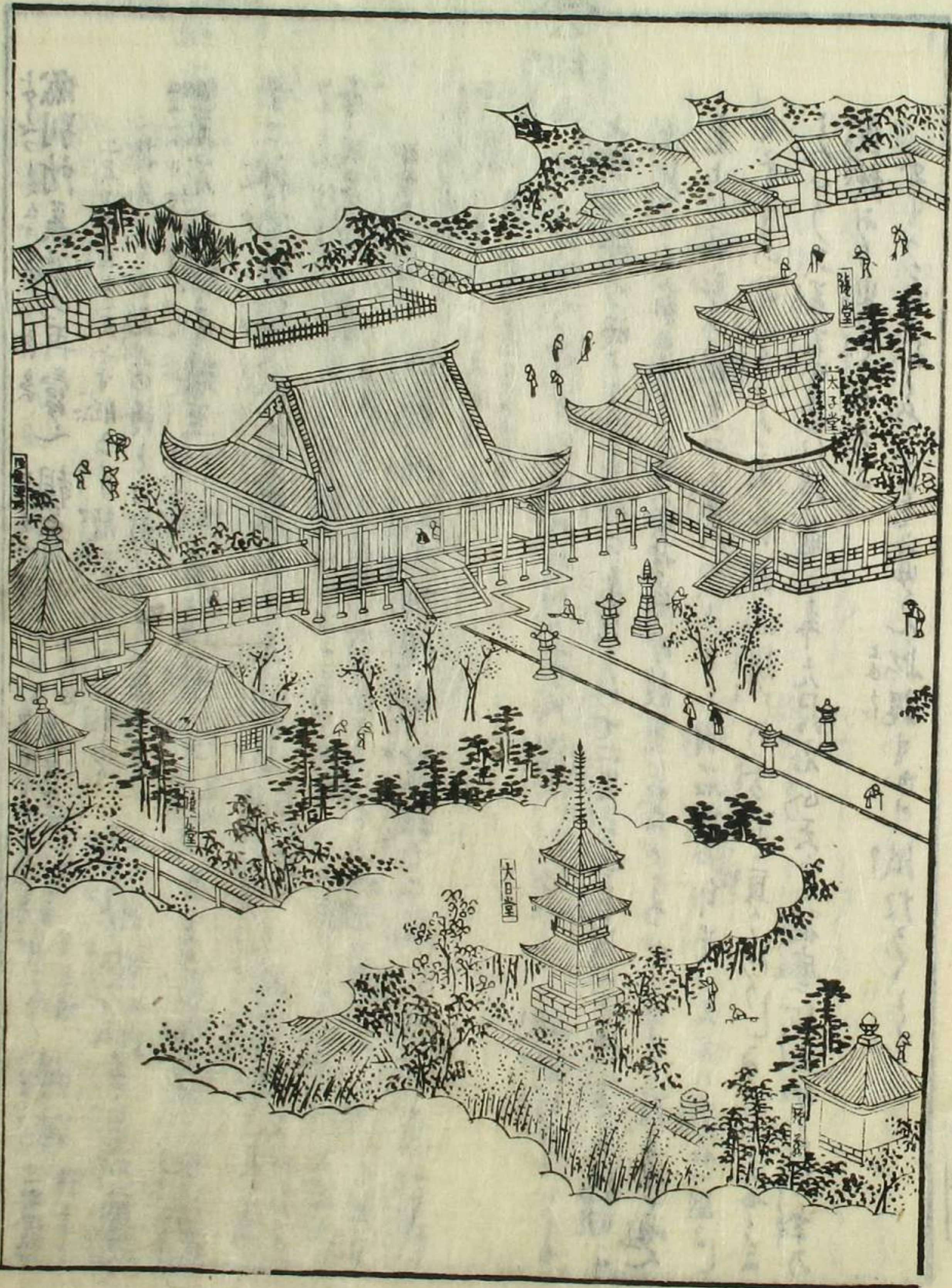


十論寺

水重九十六人溺死石塔塔
 境内あり石塔塔九十九基中央
 宝篋深塔あり藤佛し松凡
 文派元多長秀若朝舞
 征伐の時多ありあり百人
 石塔塔の附百人の内
 九十六人溺死はりて
 永世の砂の地と
 河免許あり
 今もあきり



大竺徳兵衛守の内
 置羅國又丈伽益
 三石あり釈迦乃
 五像坐像臥像
 大佛と妻以香
 小指云々云々
 是六八尺堂の堅横
 とも又い里余字うた
 三節の町あり新家
 居と云々云々
 其余抄て
 あり云々
 荷須達
 長若乃
 如哉
 法之
 ころ
 たり



刀太山
鶴林寺

城別所長治の再嘗

観音堂

二尺寸直を尺七寸

龍宮の形あり

三層宝塔

三面に面

如來左右観音惣至

日護摩堂

本尊多美佛

日光先

十二神

毘沙門天

本尊六日如來

二王門

三層宝塔

三層宝塔

三層宝塔

三層宝塔

經藏

三層宝塔

三層宝塔

三層宝塔

三層宝塔

三層宝塔

印南野

地今野中

の清りの

の清りの

の清りの

の清りの

又明石郡

の西より

加古郡

の東に

の東に

の東に

是上の極摩

の國号

の南に

の南に

の南に

の南に

てその中

の神を

より

より

より

より

長教あり

思ふ

思ふ

思ふ

思ふ

思ふ

玉も

玉も

玉も

玉も

玉も

玉も

義満

義満

義満

義満

義満

義満

い

い

い

い

い

い

中

中

中

中

中

中

い

い

い

い

い

い

後撰

後撰

後撰

後撰

後撰

後撰

将人の

将人の

将人の

将人の

将人の

将人の

池大明神

池大明神

池大明神

池大明神

池大明神

池大明神

石守右衛門

石守右衛門

石守右衛門

石守右衛門

石守右衛門

石守右衛門

天徳山常光寺

天徳山常光寺

天徳山常光寺

天徳山常光寺

天徳山常光寺

天徳山常光寺

赤松播磨守政村墓

赤松播磨守政村墓

赤松播磨守政村墓

赤松播磨守政村墓

赤松播磨守政村墓

赤松播磨守政村墓

印南

印南

印南

印南

印南

印南

加古川

加古川

加古川

加古川

加古川

加古川

造り

造り

造り

造り

造り

造り

丹波國

丹波國

丹波國

丹波國

丹波國

丹波國

二流

二流

二流

二流

二流

二流

東条川三本川を合し加古の輝の西とて二流となり一流なる所あり一流の
荒安よりわたりて海に入

まよ
まよ人の跡うらまひむじあぶくうまそくろ加古田波 小島

佛頂山稱名寺 加古川村にあり 本寺阿弥陀佛 宗 ○一鑿山龍泉寺 同村

加古川城趾 加古川村より十間四方にあり 舊名加古川城門三本別本乃幕下とて天心のはる園との
城に入りて憩息の地とのゆゑと具に同じて書字山は後を園とまはらうて忠を

泊大明神 雁南の庄 蛸正位社殿壯觀あり紀伊國日高宮生石明神の御
本村あり

糸才天社 中津村あり三方よりあり 蛸正位社殿壯觀あり紀伊國日高宮生石明神の御
本村あり

本村城趾 石碓城とて本村あり 城は雁南右衛門に節勇永和元年赤松の附後と勇長男
雁南刑部左衛門長守徳三年家留とて本村源公節勇の御功あり

大津山福回寺 加古川東の端 本寺心観音 開基聖徳太子
昔の福屋とて号し後又大津山今大義とていひて又村名福屋村とて又大

津子新村とて古名ありて昔加古川の傍の地と赤松忠心元弘の法法義徳と
号し石碓城建る天心の乳とて石碓とて石碓の地とて又福屋中曹洞宗

所名

よびむ古き石碓と印南郡河南庄大津福屋山と号す

来田村 加古川の西あり昔の来田と書しよは法花山の地記ありて法道仙人其郷の

八十石階 加古川より七八町 ○羅山神社考曰播磨風土記八十石階陰陽

二社及び八十二社の地記之地と丹波播磨若手橋ありと小祠と

此岩橋の山の麓東より西南とむくひ登るる二丁余ありて一山一石

をのぼりて淨潔として登るる石階ありあり八十のべとて道念の

名より社本幣の底天ヶ赤津吉の里名と社名とま各名其の流あり

目より耳より聞不津縁流くは又石段と踏りて回顧する小津治

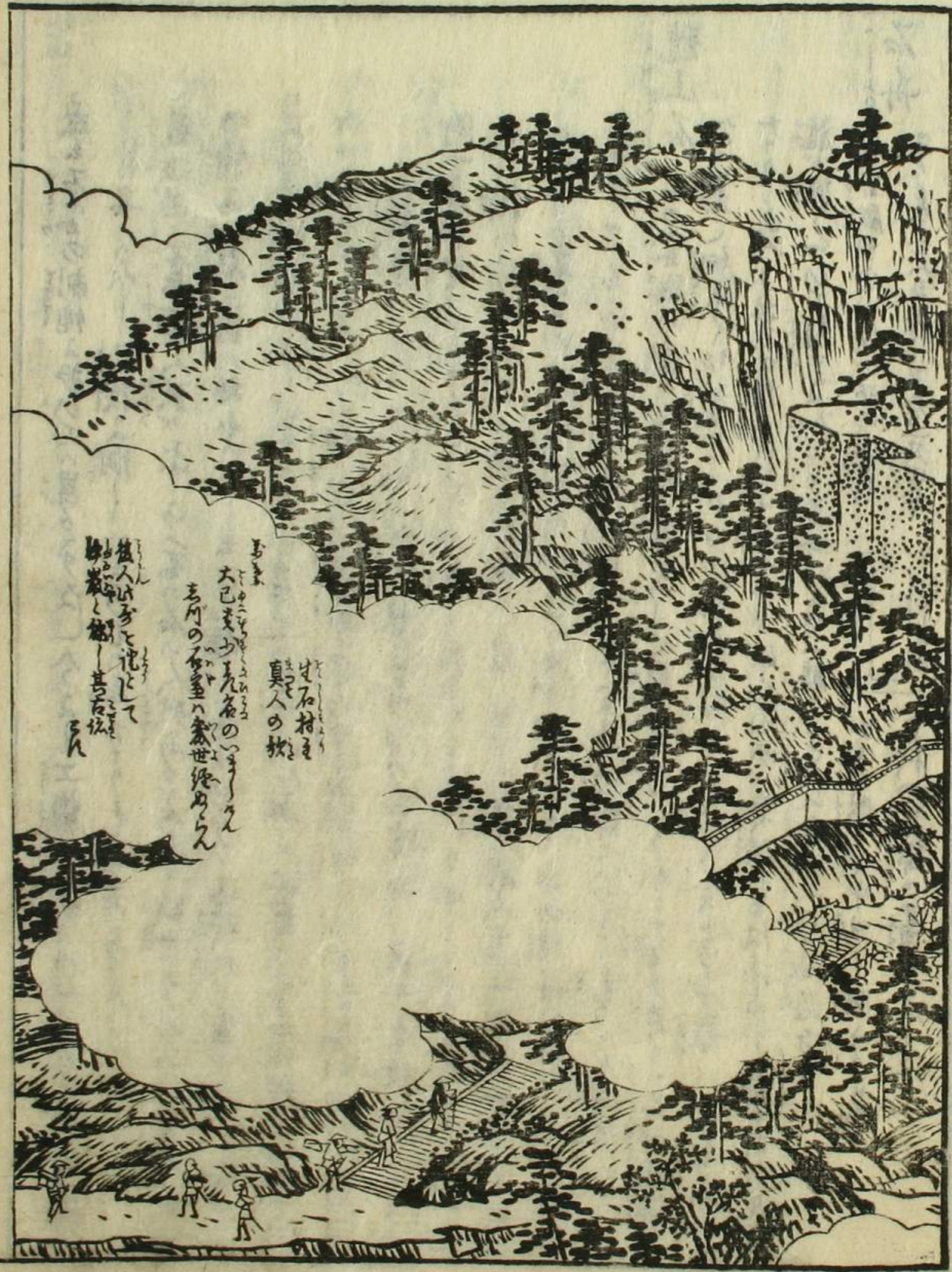
流の辰己より川より蓮瀧といはく摩耶山の秋月高津望の晴

嵐は心の塵を吹えらひる砂の遠帆尾上の松系は凡人のたまし

いと消とをりて漁火りは火の急なりぬらりれども眼乳のさぐる小

雪をよはあまれば夜白く風をよはる八十の山石とて

右根橋無社殿川氏
八条のよのまて橋
雪をよはあまれば夜白く風をよはる八十の山石とて



眞人の杖
 大己少王の杖
 志月の杖
 眞人の杖
 大己少王の杖
 志月の杖



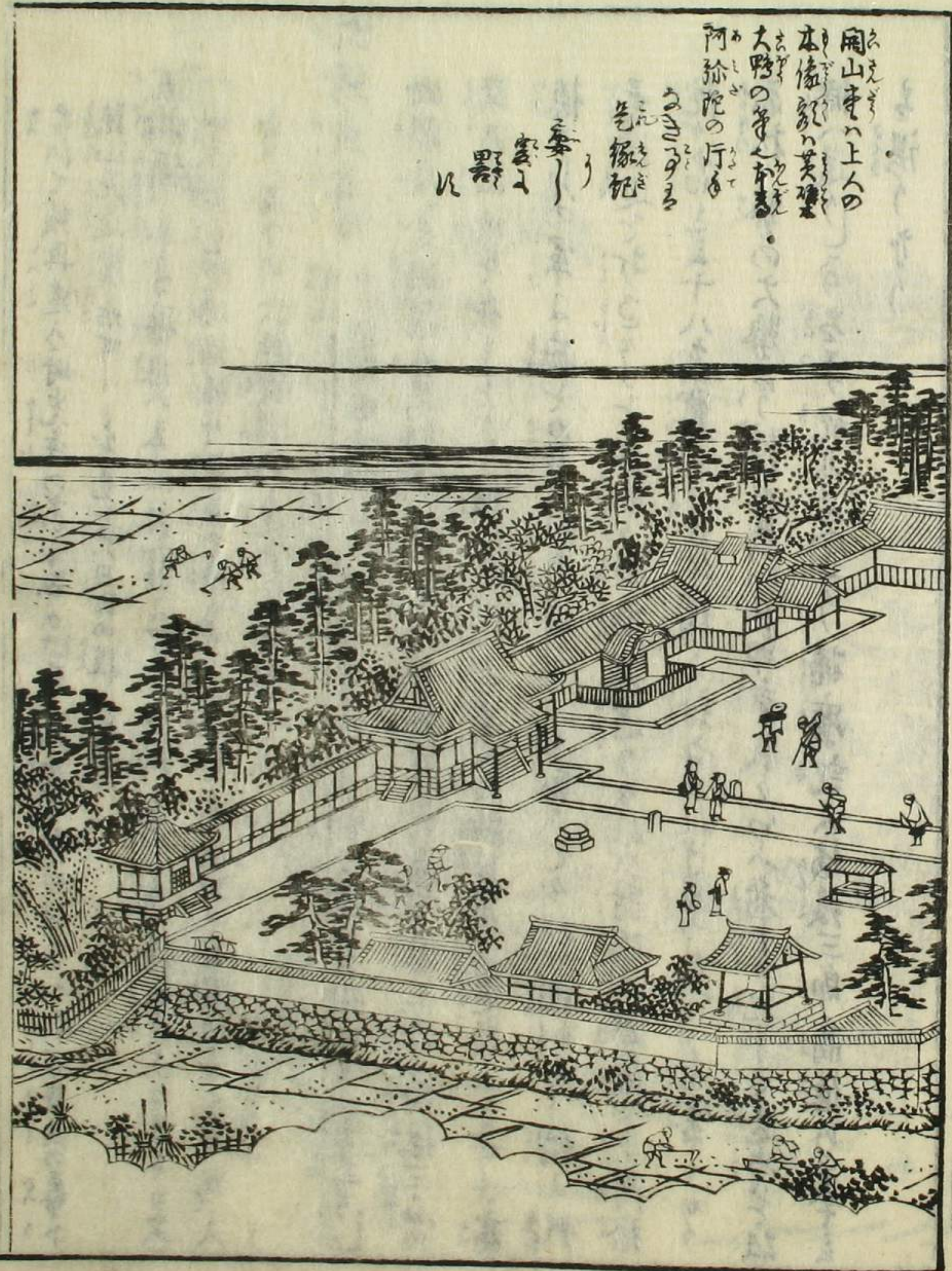
石室の殿

○我々石室の制他は妙ひて異なるべし今より工備がよかきものなりんはふち他る
 ことと異なりん一は後を削りたるものなりん考たりんを考たりんより一なり
 ○龍後園と妻郡人龍が示るる石の人形ありんは後世を名おとるを石人
 の傍に石殿三間の物ありしことと龍が室は似たり又龍に妻の名はおおし
 ○又一説は生石の石山に付ての室を名おとるは龍の石の津と謂るなり
 心うを生石の津へ乃地を名おとる龍の室の生石村を名おとるは龍の津の人を名
 一は龍の室と謂るなりは龍の奥にありし石室なり若や龍の計天を名
 御一を名おとる石室なりとせしむるなりは龍の室を名おとるは龍の室を名
 州三穂の石室の秋に付て修勢字路人考る石見國人云其園邑智郡岩倉村
 の大方に石室あり古老おほく大汝名を名おとる二穂の修勢字路人考るは即龍が
 石室なり古くは龍の室と謂るなりは龍の室を名おとるは龍の室を名
 龍山石 石の室殿の造りけし龍の室なりて龍の室を名おとるは龍の室を名
 恒より細く切龍の小川より海に横に方は龍の室を名おとるは龍の室を名
 方より方より龍の室の造りけし龍の室なりは龍の室を名おとるは龍の室を名
 龍が室と謂るなりは龍の室を名おとるは龍の室を名おとるは龍の室を名
 石室殿のふり後の西の室なり
 ありと九尺身横に尺五寸身

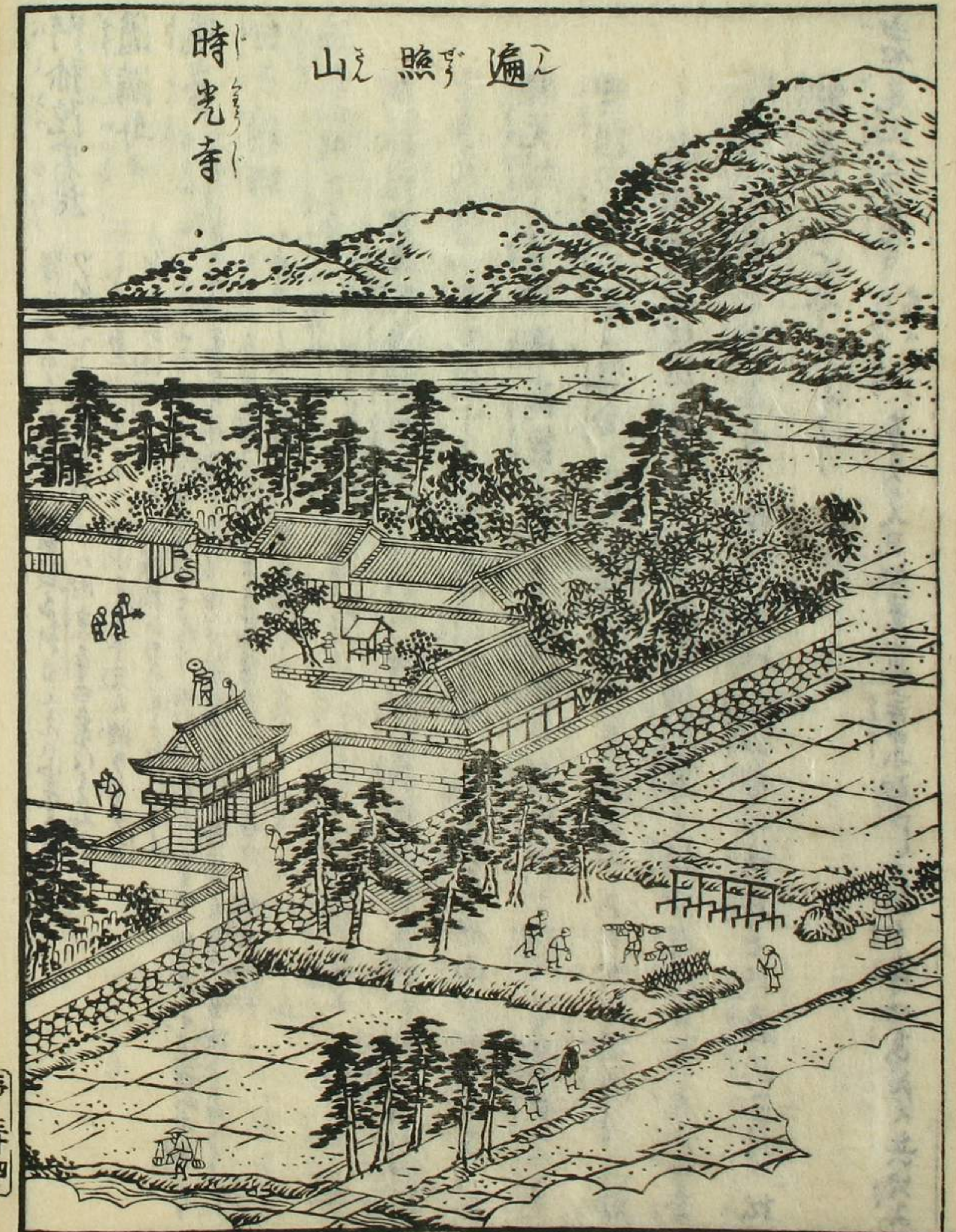


阿弥陀岩村 釋名あり東西三村家敷るなりんは龍の室を名おとるは龍の室を名
 道満舟戸 舟の室殿の造りけし龍の室なりは龍の室を名おとるは龍の室を名
 筑臺 舟の室殿の造りけし龍の室なりは龍の室を名おとるは龍の室を名
 白矢薬師 舟の室殿の造りけし龍の室なりは龍の室を名おとるは龍の室を名
 遍照山時光寺 舟の室殿の造りけし龍の室なりは龍の室を名おとるは龍の室を名
 阿弥陀如来開基時光上人之上人信性なり多田滿仲九代の孫源頼朝御
 方より天福元年三月十五日武庫川の邊より澤橋寺西山上人の方より
 時光坊と号け高徳と名おとるは龍の室を名おとるは龍の室を名
 曾根の社乃西に龍舎と建て後文永十年六月十五日今の時光寺に後
 一尚旅客結縁のふりし龍の室を名おとるは龍の室を名おとるは龍の室を名
 時光寺を名おとるは龍の室を名おとるは龍の室を名おとるは龍の室を名
 飾禁して今よりなり
 岩尾山六日寺 西にあり 舟の室殿の造りけし龍の室なりは龍の室を名

用山寺上人の
 本徳叙の美徳
 大徳の身なり
 阿弥陀の行も
 三つがら
 毛振起
 三つがら
 雲々
 此



遍照山
 時光寺



六騎武者の塚



ちいて後再建の時光寺の末よりけ寺荒廢の時乃りりや別石長治の幕下
 後山尾近寓居せしとを先と大日山の構との
 五論塔 年号曆應六年三月之外に空の刻字明るは衆生の二を耳又
 たり君是思傳後守龍長の墓より建武三年此地は自害のやを平記に入
 あり尚下の六騎武者の塚に合はる

六騎武者塚 延元元年足利氏九州より来りし
 時服屋義助播磨引止し又思傳後守龍長子息三郎高德三石の
 南の山治を夜もとがり蹴てさし乃浦へ出脇屋敷又退付んとせし高
 徳とれの軍と敵と争うたるが目々くありてはれは相知る僧は我
 岳溪辺を打とると赤松が兵治政遷りたれば討破り那波より阿弥
 陀が宿とよ十八夜我ひ自後六騎討たれけ堂又入り自害たり
 赤松が勢の大勢を弥九郎重氏とらふ者葬れして遠背と故
 郷へ送りしを平記み入るる播磨記又後三郎高德の墓と
 を誤りたり

佛心寺

釋乃より一丁半南小社村

此寺の境内に古た五輪塔あり満仲乃石

塔とらひ佛の延喜元年に五輪の石に同様の石の古手より石塔を
掘り其古手の昔より佛心寺の法守とらひて正月幸乃改は供膳
なせしむるなり

安養寺

後居村西

後居村西の安養寺は延喜元年七月六日壇那彌
とらふ文書二年文書法師住すと

伊保崎

荒年の西より今伊保崎の古昔の伊保の磯
とて大船の磯なり今も伊保の村あり

加茂明神社

日加茂の古より昔の村中よりありてを改むるに延喜年中
西製町に地を東邊郷の古より日加茂の古より山と改むる

流るるに社とらるる中よりきてと改むる社をあらん

所名

飛錫塚

右中より西より延喜山の飛錫は道仙

高夜石

仙人とれよ庵にて中甲の
古夜石といふ

因堂

奥津村に石佛のありて法ありては光上人の佛記なり

梅の舟

一名不滅の舟とて奥津の舟と改むるに延喜年中
の舟とらるるに改むるに延喜年中

曾根天満宮

曾根村に天満宮のありて延喜元年
九月十日

延喜元年曾根公統の家へ請遷の御所なりはけ伊保の磯へ寄せ給ひ社
より一丁半西捨美の園に四方の延勝地なりはけ宮と捨美二天沖
とて稱しなる天正六年豊臣秀吉より再宮とらるる
境内攝社あり園とて記し本宮と天徳日命と祀るに曾根家の祖
神とてはなり

菅原道真の三奉議是善并三のふに十一歳ありて詩と賦に

月耀如晴雪 梅苑似照星 可憐金鏡轉 庭上玉房馨
貞観中文章は是奉らるる下野持統と持く及等して玄蕃女とらるる内
記に持統の御時後即終ひ詔りあはるる及京時平に日く萬機の政を
和し心三佐と叙し中宮とて兼る昌泰元年内覧の室とて叙して右

臣は拜せしるは時表とて是と辨とれども徳は三年國向くみんとは道真
國を拜して是は且奏曰は今日臣と召してはさし附ハ入此れと候は
て春日柳眼中の詩を候して執事とてしるは因て帝法皇各御衣と賜
て召さし高御衣の召さしより時平少きを候はしめて國向の詔
をばて給心は候はし時平源光の帝の舅とて是は定國とて候の事あり
ともは道真が下の若くはを候はせは是は東宮根とて道真と候はし心あり
知りて時平は是とて候はし心ありともは道真と候はし心あり
して曰道真が女は世親王の嫁とて候はし心ありともは道真と候はし心あり
國向をばしはせんとの心ありと候はし心ありともは道真と候はし心あり
終は延嘉元年正月右宰相帥と候はし心ありともは道真と候はし心あり
子候はし心ありともは道真と候はし心ありともは道真と候はし心あり
ともは道真と候はし心ありともは道真と候はし心ありともは道真と候はし心あり
異はに候はし心ありともは道真と候はし心ありともは道真と候はし心あり
も候はし心ありともは道真と候はし心ありともは道真と候はし心あり
さし心ありともは道真と候はし心ありともは道真と候はし心あり
不居して清居候はし心ありともは道真と候はし心ありともは道真と候はし心あり

菅原日記の書と候はし心ありともは道真と候はし心ありともは道真と候はし心あり
長谷雄橘度相都良香の詩集希ふは道真の幼少書とて候はし心ありともは道真と候はし心あり
覺して七年後時平菅根相候はし心ありともは道真と候はし心ありともは道真と候はし心あり
以帝後注と候はし心ありともは道真と候はし心ありともは道真と候はし心あり
左遷の室有は道真の書を記せし心ありともは道真と候はし心ありともは道真と候はし心あり
其洋方々の書を記せし心ありともは道真と候はし心ありともは道真と候はし心あり
社と号し心ありともは道真と候はし心ありともは道真と候はし心ありともは道真と候はし心あり
菅原朝臣と候はし心ありともは道真と候はし心ありともは道真と候はし心ありともは道真と候はし心あり
建のひい画像と候はし心ありともは道真と候はし心ありともは道真と候はし心ありともは道真と候はし心あり
此ははし心ありともは道真と候はし心ありともは道真と候はし心ありともは道真と候はし心あり
在りし心ありともは道真と候はし心ありともは道真と候はし心ありともは道真と候はし心あり
年八十は紫雲寺ありともは道真と候はし心ありともは道真と候はし心ありともは道真と候はし心あり
して名けて東塔とて候はし心ありともは道真と候はし心ありともは道真と候はし心ありともは道真と候はし心あり
心候人け人の祠と道真社の例と建てし心ありともは道真と候はし心ありともは道真と候はし心あり
或曰く世に雷神と候はし心ありともは道真と候はし心ありともは道真と候はし心ありともは道真と候はし心あり
修りし心ありともは道真と候はし心ありともは道真と候はし心ありともは道真と候はし心ありともは道真と候はし心あり
心ありともは道真と候はし心ありともは道真と候はし心ありともは道真と候はし心ありともは道真と候はし心あり
心ありともは道真と候はし心ありともは道真と候はし心ありともは道真と候はし心ありともは道真と候はし心あり

曾根

天津

曾根の松

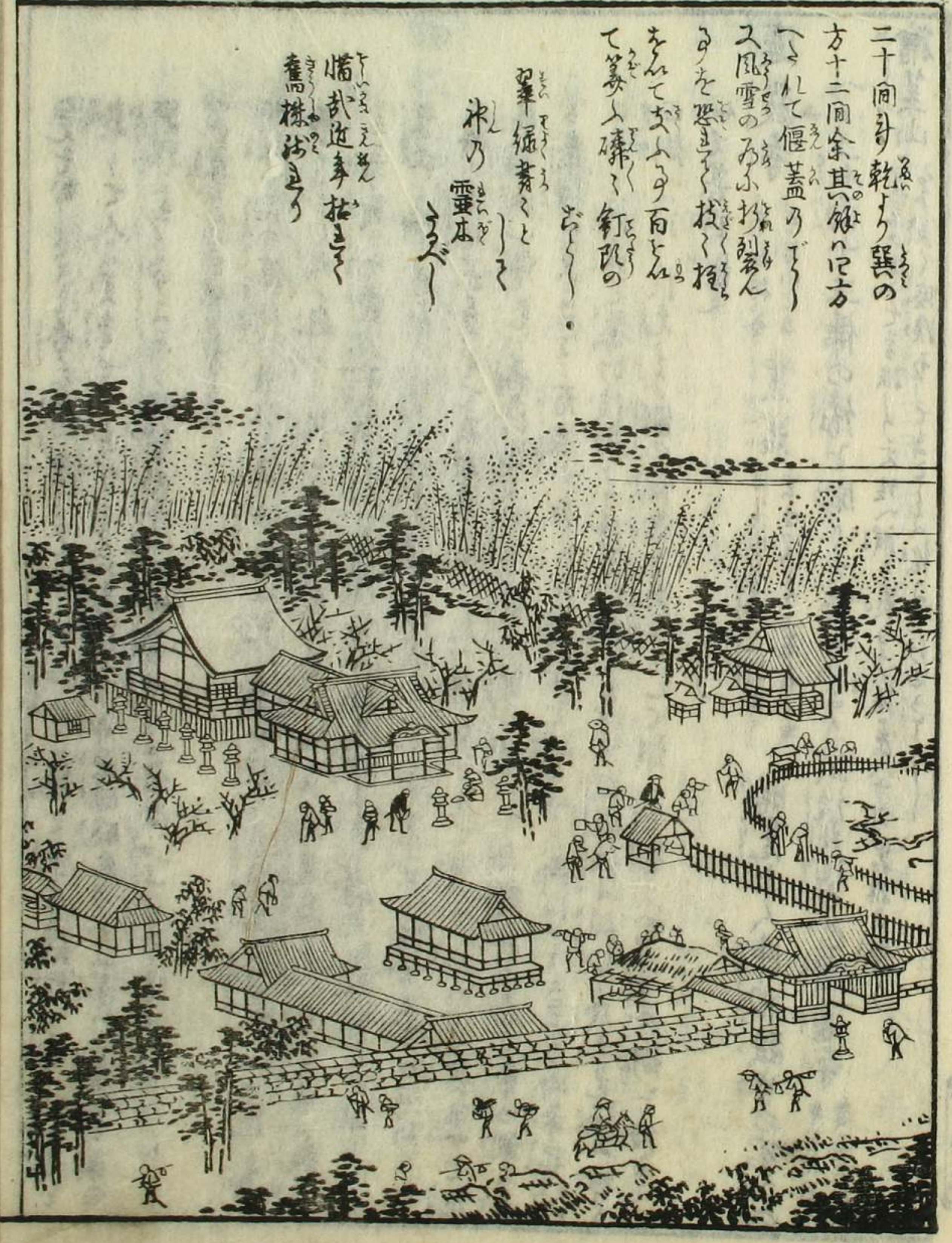
津殿の巽あり
 菅の息想の海
 松の苗と枝と我
 飛の葉と新
 終ふ既と
 余も橋の形あり
 枝乾と云と云と傳
 三に尺段地と地
 おくわゆる流と
 西より柱の太き
 毛丈八尺と云と云と
 民の方より坤の向



二十間身乾より巽の方十二間余其の餘に方一にして偃蓋乃て又風雪のふふ松の根をを怒りて枝ををみて支より百とて築人礫の釘の

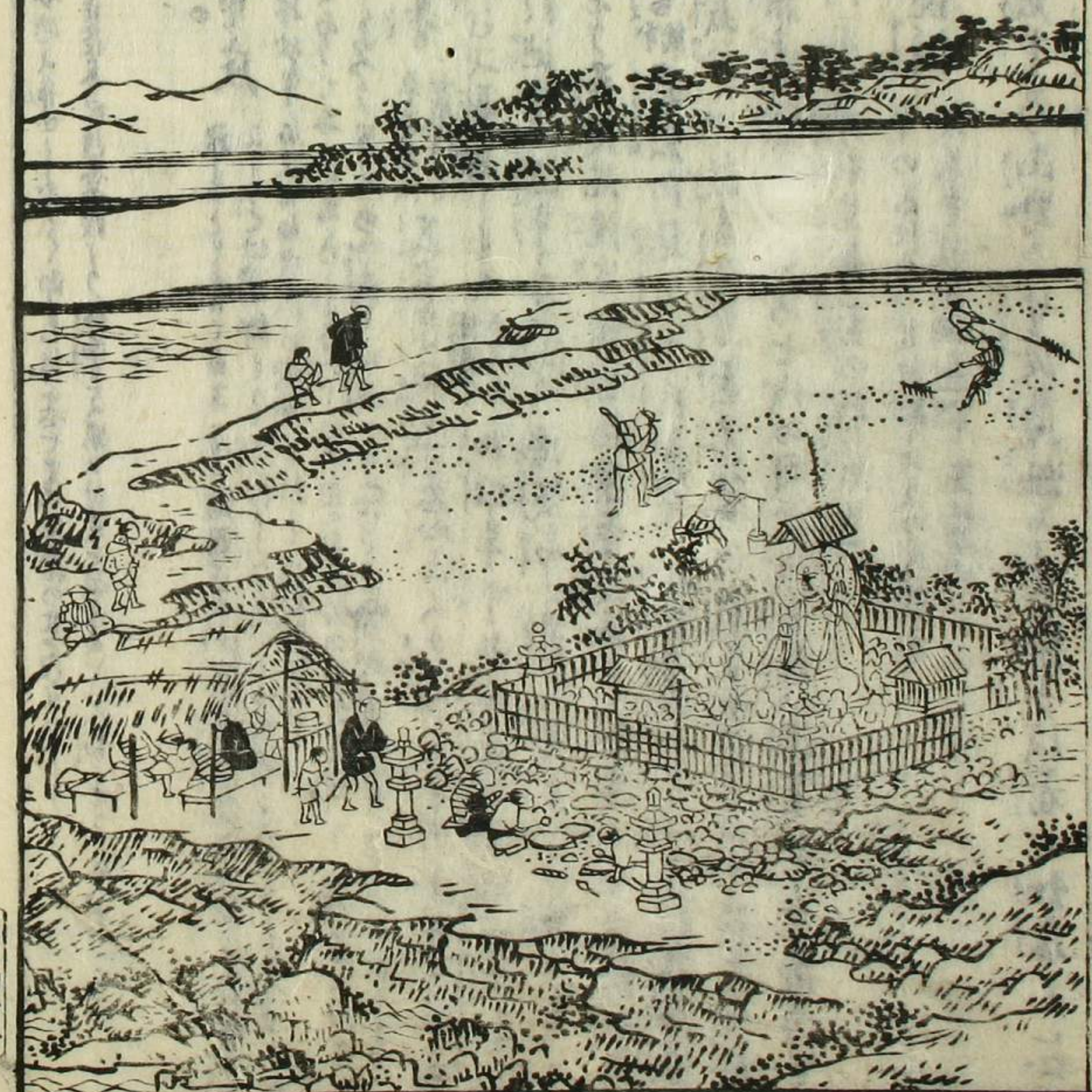
津の雲
 津の雲

脂哉近事枯
 喬林枯

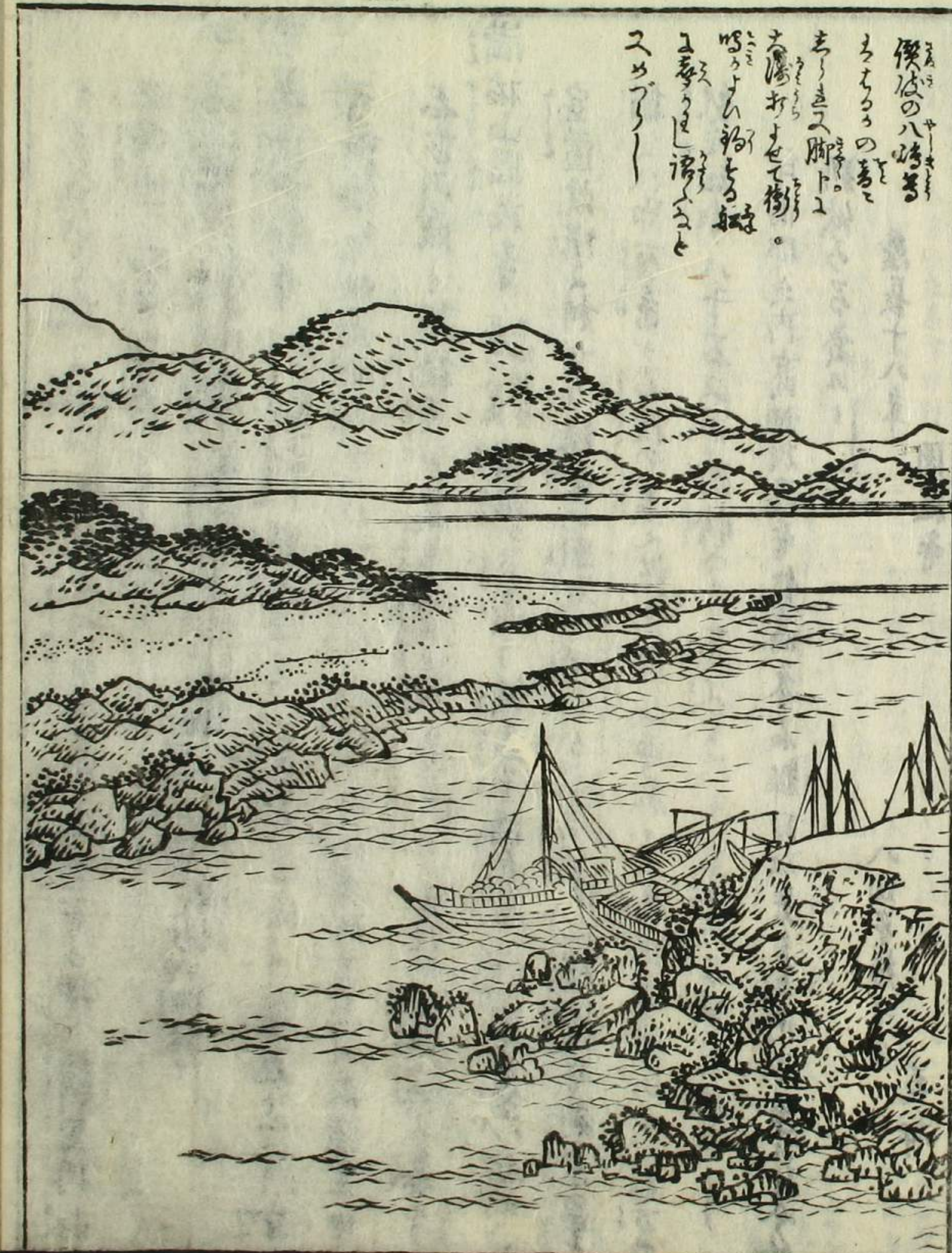


八家
地

けさるは
石と好
海の石
又い石
秋てれ
傍に
想ふ
阿波乃



僕はの八
去るは
大橋
又さ
又さ



イコといふ様は附はしこれ石鐘乳の古中とせざる也之江州月川山
州西山三法寺なるにあり

中道山城趾 志方の左園村より赤松朝の御代相續て
志方の左園村より赤松朝の御代相續て

中道山安樂寺 志方の左園村より赤松朝の御代相續て
志方の左園村より赤松朝の御代相續て

阿弥陀如来用山実信僧都中興梅道瑞上人永福年中
志方の城を攝橋元京進秀則再建中興実信言と云院内赤松上総公墓あり

満祐山圓福寺 志方の左園村より赤松朝の御代相續て
志方の左園村より赤松朝の御代相續て

宝蓋院塔は刻せり塔基の圓趣と供じり水溜り赤松攝磨守則系の里
櫛田八郎有系が石権の蓋之法名園福寺殿と建保年中の人と志方の
領主知妙八千石又寄附状あり其文は始末の書法右雙足付也

伊南郡之内高畑村の寺は高参石輝政以来赤松御寄進に由今
別儀ありあるに
慶長十八年
園福寺
八回を後守久
花押

八幡宮 志方の左園村より赤松朝の御代相續て
志方の左園村より赤松朝の御代相續て

天祥山古城 志方の左園村より赤松朝の御代相續て
志方の左園村より赤松朝の御代相續て

大澤清水 志方の左園村より赤松朝の御代相續て
志方の左園村より赤松朝の御代相續て

大友山長樂寺 志方の左園村より赤松朝の御代相續て
志方の左園村より赤松朝の御代相續て

帝の御時託胎祈のる相國法皇地孫二十六軀を刻せて國々母一
まると安直以今け寺のわき其之靈應よく安徳帝降誕在せしと云り

助承池中産 助承村の用舟溜池の産
助承村の用舟溜池の産

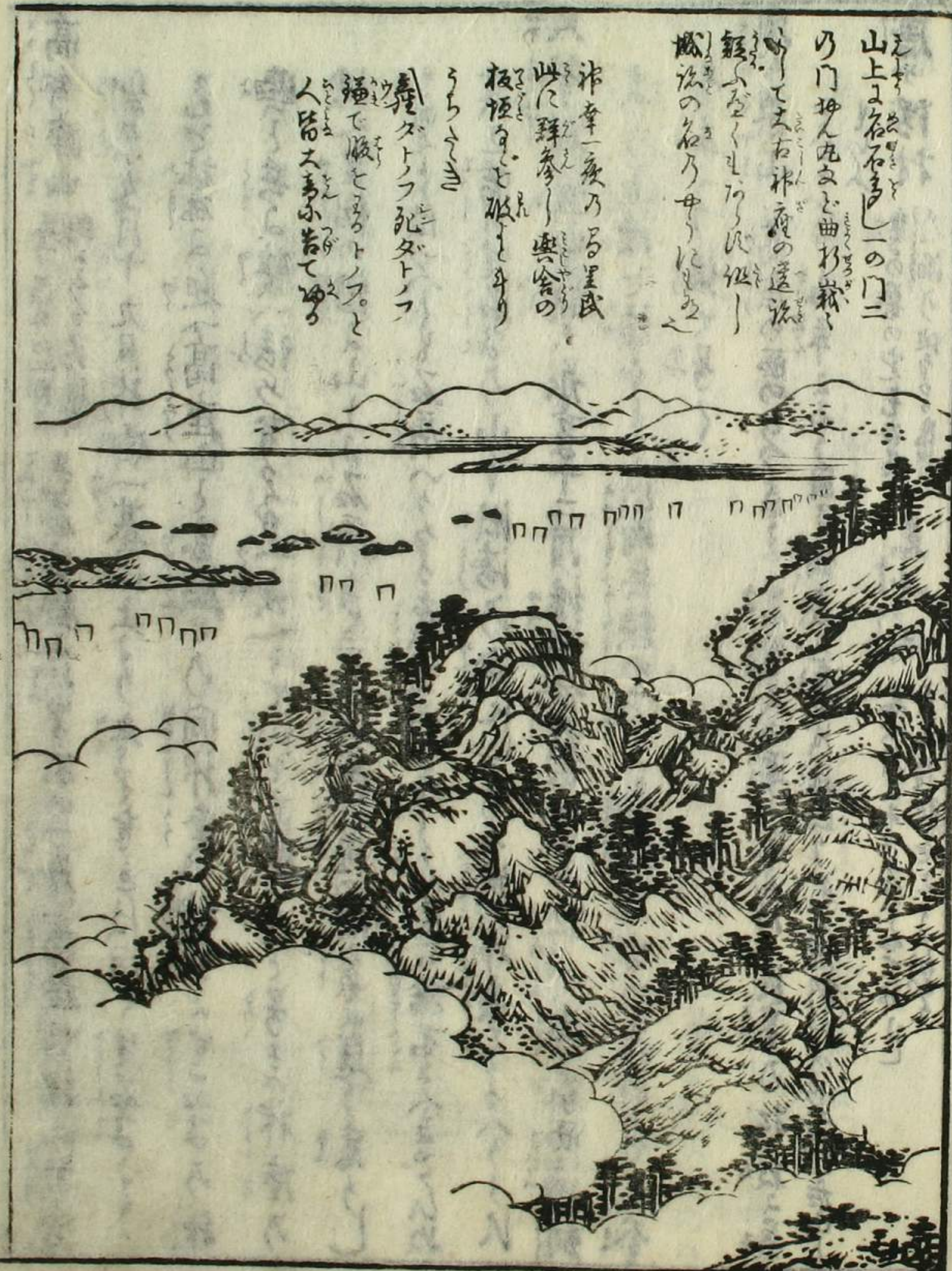
早水拂をのり人御て龍殿と云り必雨と云り

高御位



山上は石多し一の門二
の門押ん丸文と曲り松
ゆて大右林蔵の遠流
軽ふるくしゆくは似し
城法の名乃中しにあり

津幸一疾乃る里成
此の群衆一奥舎の
板垣をいし破しなり
うらふき
壘タトフ死タトフ
強て版とまるトフと
人皆大勇ふ若てゆ



法華山



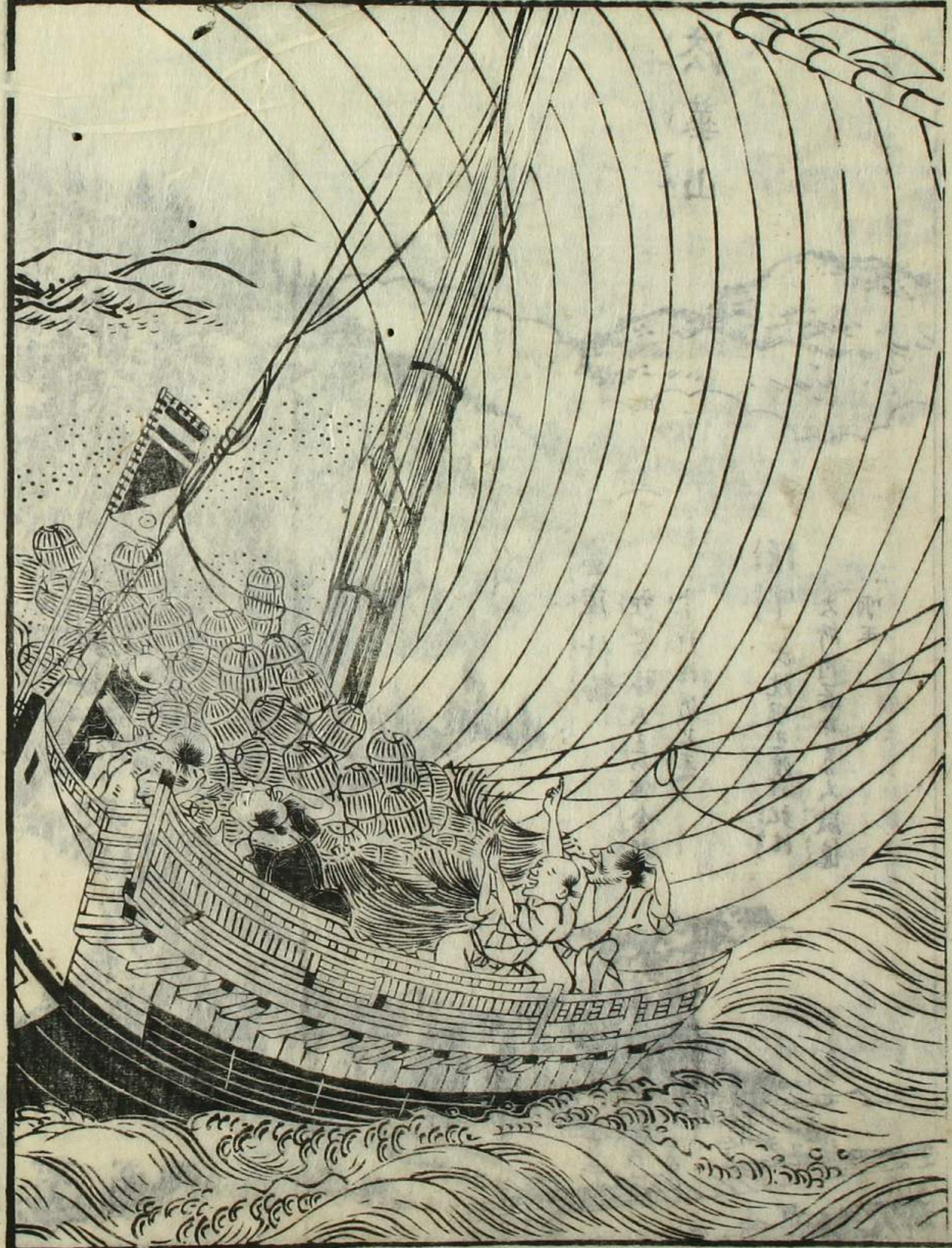
宝庫什物
 釈迦の像及びの佛舍利
 宝印法道持来
 塔中 六院明王院の法
 之所所居なる又威徳
 明王



孝徳天皇白雉元年
 聖劍用基法道仙人
 西園二十六番の札所
 本寺親安寺といへば八寸
 黄金佛天竺佛来
 服士毘沙門不動
 服檀元三三所画像毘沙
 門毘沙門の尊 三層法
 又親如来 常妙寺阿弥
 陀 九層石塔安楽の傍
 ヲ所 円山乃所教を内
 輪秀奥院法道仙人の廟
 巖屋の内あり法華
 漢彌の石像あり



法道
奇事
の



又法道かの神と飛せて其末と乞ふ及みこけの御厨の控祖より
私に終にぞうぶとけい多し神の室く飛久る小松中の末儀悉く
神に付て室を飛来する雁ののじし及みよと終るき山よのかりと
飛と謝せば又其儀えのどく如く飛入りたり其の帝と奏聞し
多しおろし御不縁の幸ありて法道を石と持念を以て玉體奉
養はしくたり其後白雉元年勅を以て伽藍建立就て即ち奉
其後法道一語を誦して仙苑より

我化有情乘此地 留置像神舍利羅 一涉斯境所求得

永出三途見佛陀 余余法道の言む我舎を付てはし今尚存とるもの言
我云宜神といひ飛神といひ空の悟の持物とるものといひ文系と錫神飛空
と云ふありと云右物語りの青のい字法捨遠よもといふ

又或云物語りの系といふはし御厨車賣の末私といふは及み其正由とてけい
法道邪樹の妖人といふは強て實は法道がうけをたれおふはけいといふは後世
九條の妄言をいふ

播磨名所巡覽圖會卷之三終

